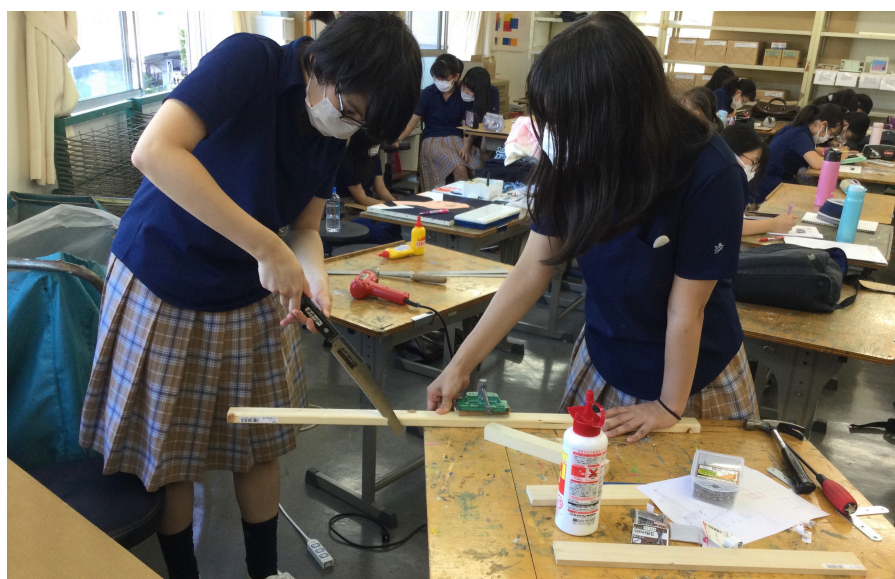


2021年度白ばら祭 ひかりの芸術展

今年度の文化祭では、美術部・作画部・文芸部という三つの文化部が、それぞれ「光と闇」というテーマに沿い、絵や文といったそれぞれの部活の特色を生かした作品の展示を行なっています。展示の目玉となる合同作品は、美術部が描いた背景に、プロジェクターで作画部の描いた人物の立ち絵、文芸部の書いた短い章を映し出すという形で、それぞれの作品の融合を図りました。この時勢の中で、今までにない挑戦とはなりましたが、作品に込められた生徒たちの熱意が少しでも伝われば嬉しく思います。



美術部

文化祭では毎年テーマを決めて部員全員で制作する共同作品と個人で描く個人作品の二つを展示しています。毎年共同作品は特に手の込んだものを作成しています。



去年度文化祭の様子



今年度テーマ 帰り道

状況がかわりリモートなどで家から出れなくなってしまう毎日当たり前に通っていた道すら特別に見えるようになったという理由で帰り道をテーマに設定しました。それに追加して、夕暮れや影などで共同テーマの光と闇の要素も表現し、個人個人の思い出のある帰り道を作品にしました。

作品は絵に限らず、立体など幅広く活動しています。今年度の文化祭での活動はお見せするのは難しくなりましたが、毎年オープンキャンパスや東京私立中学高等学校生徒写真・美術展での活動も行なっているので、興味がありましたらぜひお越しください！

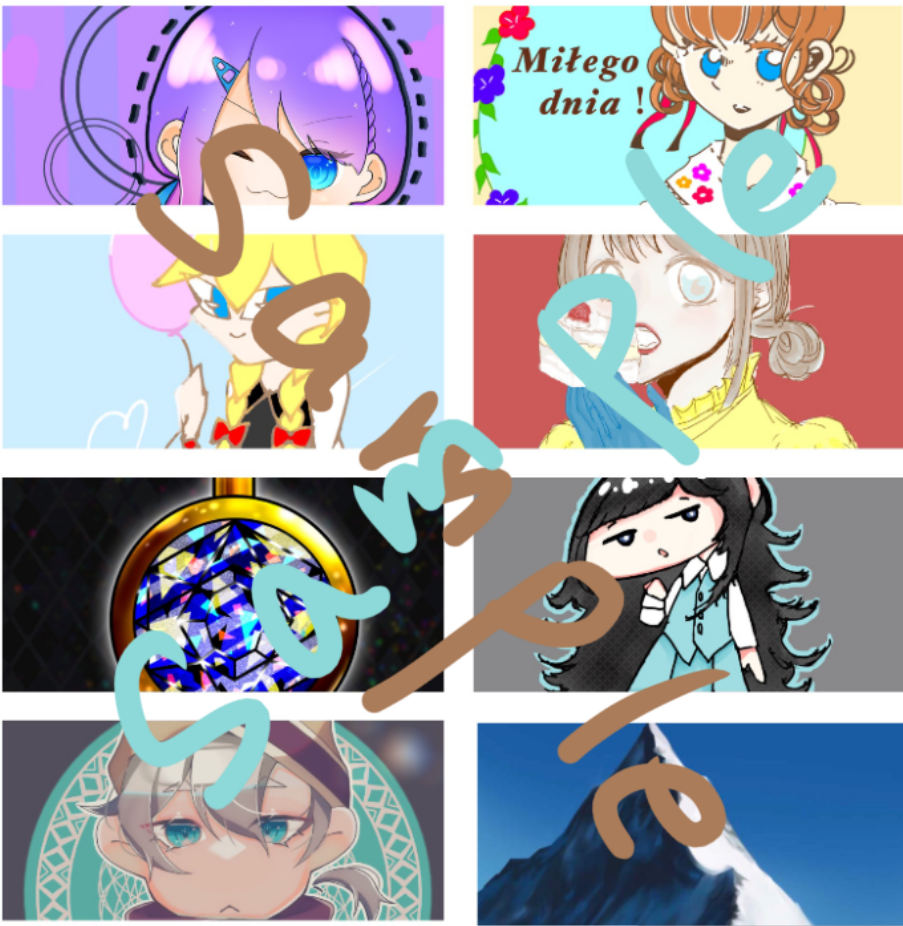
今年は11月18日～11月23日まで上野の東京都美術館で開催の東京私立中学高等学校生徒写真・美術展に出展しています。皆様のお越しをお待ちしています。



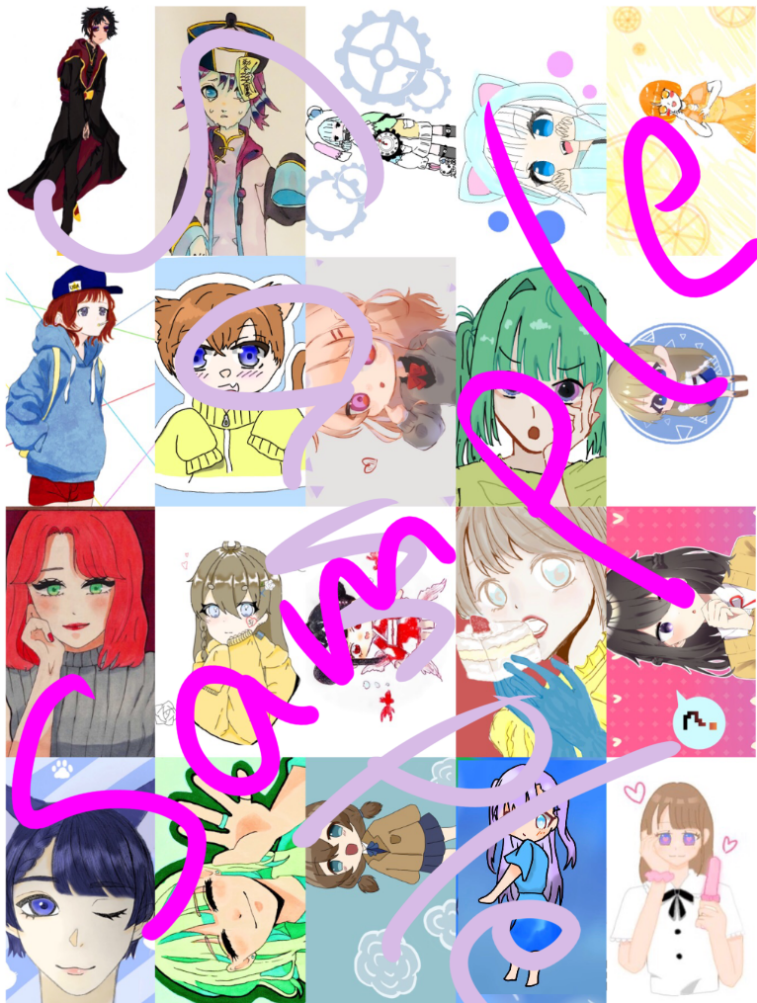
作画部

作画部は例年通り部員が描いたイラストを載せた部誌の配布、部員のオリジナルイラストを載せた缶バッジとシールの販売を行い、収益は全て寄付させて頂きます。また、教室内展示では共同作品の他に各部員が描いたボードのイラスト作品を展示させて頂きます。

缶バッジ用イラスト



シール用イラスト



文芸部

こんにちは。文芸部です。

「部活何してるの?」と聞かれ、「文芸部だよ」と答えると、大抵「何してるの?」とまた聞かれるか、手芸部と間違われるかというような部活ですが、この度は美術部、作画部とのコラボで例年より規模の大きい展示ができることになり、たいへん嬉しく思っています。

さて、ご存知の方も多くいらっしゃると思いますが、文芸部では毎年文化祭で部誌の

発行を行なっています。今年は「テレビ番組」をテーマに、部員が個性豊かな作品を

書き上げてきてくれました。今年度は特に、文字数が多く気合の入った作品が多数ありました。

その中から、部員全員でリレー形式で書き上げたリレー小説と、今年で最後の寄稿となる

五年生の作品のみを抜粋して次ページより掲載させていただきたいと思います。

部員たちの熱意のこもった作品を、ぜひ最後まで楽しんでお読みください。

未完の週末

2021年度 品川女子学院文芸部

グ
イ
ー
ナ
ス
・
マ
ー
ダ
ー
・
メ
ラ
ン
コ
リ
ー
!

亮

耳高い女性の声が響く。周りに助けを求めようとして、しかしその口からは意味ある言葉が滑り出ることはない。パニック状態になつて荒い息ばかりを吐き出しながら、ぼろぼろと涙を流していた。その作画は素人目から見れば流麗で洗ひがなく、少なくともネット上で「種」などとウケ印を押されることはないだろう。まあ別に、このアニメの作画が良からか悪からかわるが、全く関係ないことである。そう、原作者にとっては、巴鶴恵照、そして本作巴鶴浅葱は、スマートフォン上の小さな画面に映るアニメ映像をばりやりと見ながら、皿に盛る鮮やかなのちのちのプチトをフオーで転がして、昼下りのあまりのなまなみにアフレコで、こうして長閑な春の陽射しを大きな窓を透し、いばいに浴びてゐる。そんな巴鶴を、どうしても怒鳴つけてやらねばならない理由が私にあつた。私立立ち寄つたファミレスの店内で巴鶴の姿を見つけたのはその偶然である。彼を探しにきたのは、何の多少語弊があるかもしれないが、それでもない場所に行かぬに足らなれなかつた。……いもいも考えたくなかつたのだ。私は荒ぶる激情を何とか抑えつつ、ゆつと、と彼の座る一番テーブルに向かい、思い切り怒鳴り散らした。

「巳嶋憲昭！貴方またこんな場所で堂々とサボりとは良いご身分ですねえ！」その時の、客や店員、そして当の本人、巳嶋の驚きようと言つたら、なかった。怒りに支配されていた私は、そんなことに気にする余裕もなかったが。

「そろそろ許してくださいよお、傘寿さん」

う嶋は猫撫でてと言っている。悪魔の如く、一瞬に風の前の灯を立ち立って私を見上げた。その様子はさながら震える子鹿のようにも見えるが、本性は六匹連続的切殺りをしてしまった悪魔の犬だ、流石さういふ見方をする。作家である編者や記者としての死闘的勇気は、何であらうか、もちろんそれは細切れ切りまで原稿を取り立てられるか否かだ。それを六度も敗戦しては、私の給料どころか今の地位さえ中々危うくつてくる。職を追われるだけの御伽抱き。前任の担当は奥度なく多くの男のサボった発狂行為内因で苦しめられ、苦しみぬかれた。後に、戦争が敗れられた時はこの世の終わりを悟ったものかもしれない。何もかも懐かし。たまたま教育機関で出た出来事であるのに、妙に長い間彼にうして怒声浴びせ続けた気がする。私はじと眼下に悪魔を見据えながら、進まない手先の無言で抗議を表しながらお尻に、彼の書く「猫撫で」の中々面白い。今季題のアニメ『宮の明星』原作の問題として彼は作者として大した大七つ編で、私の一番の人でもなく、だからこの著作を出して欲しいという。若干不純思ひも混じっているが、出て来たものでしょう。それともとかく、次の原稿をつぎと仕掛けてほしいは確かなのだ。未だ動かない骨張った白い手を脱つてつづつ、さてこれからどう機に合わせ続けようかと突然現れた義同行をむなしく言っても全て白紙に帰る。いや、一体どの編者に、数枚後刑事を継続したいならそれなら有言無言せず作家を連れていくかも知れないなんて考えたのか？少くとも私は見えなかった、貴方もきっと無理でしょうよ。とにかく、私は彼別れてしまったので、ここから先はこの著作の後、彼話してくれたい取調への回答を記載しようと思う。嶋は目についた鋭い中年男性に、時勢變により市井内警署は急に連れた。それで、これの取調の内容を話したくなってを詳しく聞きたい。最後に、先週の曜日後半時市民館裏の道付付近でうつろっていたよな、と念を押すように聞かれたと言う。特に隠すこともないの市民館に行った覚えはあると

▲今年度の部誌の表紙見本

部で一冊見本を保管しておりますので、
入学後の部活見学で是非全文をお読みください。

▲内容見本

部員が提出した文章を、部長がまとめ、一つの冊子にしています。

文芸部

ドラマじゃない君が好きだ

けたたましく鳴るアラームにスマホのバイブレーションが重なって、直接脳に響く刺激。体は眠りから叩き起こされる。まだ眠気に苛まれる体を無理矢理動かし、ベッドから起き上がった。

「叶波ー！いい加減起きなさい！」

一階から母親の声がする。

「は一い！」

眠気を振り払って返事をし、顔を洗い下へと降りた。焼けるパンの甘い香りに、スープの煮立つ音。母の後ろ姿はカウンターの向こうで忙しく動いており、リビングのローテーブルには父が読んでいたであろう新聞紙がそのまま広げられていた。近くにあるリモコンを手に、テレビをつける。

《再び人型のロボットが破壊された状態で発見されました。》

明るいい色のカーディガンを羽織ったアナウンサーが少し緊張した面持ちで喋り出す。元女優だったという理由で注目されていた人だった気がする。確か名前は、水原伊津美。映された映像がVTRに切り替わり、再びアナウンサーである水原が喋り出した。

《昨夜22時ごろ、港区港南のゴミ捨て場に『人が倒れている』と通報があり、警察が確認したところ人型のロボットである事が分かりました。また、アスキニク社のロゴがプリントされている事から、『アンドロイド連続殺害事件』の一つとして捜査を進めていく方針です。》

水原アナウンサーが一息置くと映像がアスキニク社の記者会見映像へと切り替わる。高そうなスーツを着込んだ中年男性が、一つ礼をするとパイプ椅子に座った。

《本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。今回は世間を騒がせている『アンドロイド連続殺害事件』について話させていただきます。まず、この事件と我が社は何の関係もありません。我が社も勝手に名前が使われ、ましてや事件の犯人であるかのように仕立て上げられている状況です。真相も分からず、ここ数日は活動を自粛しなければなりませんでした。》

アスキニク社は日本を代表する会社で、その内容は主に機械業。車や新幹線の開発をしていたはずだ。それを止めたことで市場に影響が、みたいな話を両親がしていた気がする。食い入るようにテレビを見つめていると

「ちょっと叶波、朝ごはん冷めちゃうわよ？」

あめいろ

母から静止された。

「もう、テレビ見る場所も近いし……。学校遅れるわよ？新学期から寝坊なんて許さないからね？」

「わかったよ、今食べるから！」

さっさと制服に着替える。

「朝からニュースなんて重いわねえ」

そう言って、チャンネルを変えたいらしい。次に映ったのは週間視聴率ランキングだった。

堂々と一位を飾るのは「恋色メモリー」。最近話題の恋愛ドラマだ。学園青春もので、転校してきた主人公が学園生活を変えていく話。気の強い女の子が主人公でどんどんと周りの男の子達の目を惹きつけていく。言いたい事を思いっきり言う爽快感と、何より周りの男の子達がこの上ないくらいにイケメン揃いなのがこのドラマの売りだった。中でも一、二を争うほどにイケメンなのが逢沢役の「春川秋斗」。キャラ設定も完璧で、徐々に主人公に心を開いていく姿は女性達の母性をくすぐり人気を根こそぎ持って行った。

「この子かっこいいわよね」

母がそう言ったのはやはり春川秋斗だった。

「その子、一番人気だよ」

「あらやっぱり？なんて言うか……。オーラがあるわよね」

そんな母親の薄い感想を聞き流しながら朝食を口に入れる。サクッとと言う軽い音にとろりと溶ける目玉焼き。濃厚に絡み合う二つがたまらなく美味しい。起きてから30分。そろそろ朝食は切り上げないと間に合わない。

さっと歯を磨いて髪を結きながら荷物の確認。丁度5分前。

「じゃあお母さん行ってくるね！」

「は一い、気をつけて行ってらっしゃい」

鞆を持って家を駆け出した。走っていたら角でイケメンとぶつかる事なんてないかな、という妄想をしながら。もちろんそんな事はなく、無事に学校までたどり着く。チャイムギリギリで着席すれば、鳴り止むか鳴り止まないかの間に先生も入って来た。

「ほら全員座れー！今日は大事な話があるんだからしっかり聞けよ」

相変わらず気だるそうな担任の声に、生徒達も徐々に席に着いていく。どこか、教室にざわめきと落ち着きのない雰囲気が漂っていた。

文芸部

「よし、ようし、全員席に着いたな。じゃあHR始めるぞ」
いつもと違い、得意げに教卓に手をついた担任に、教室のざわめきが無くなる。しかし、どこか落ち着きのない雰囲気は漂い続けている。

「今日は、転校生が来ている」
もったいぶった割に、さらりと担任が言った。数秒の沈黙、その後に溢れるような歓声。高校になってからも転校だなんて本当にあるのだな、と周りに圧倒されて呑気なことを思ってしまう。

「ほら落ち着け、落ち着け！今回の転校は特殊なんだから、お前らにも協力してもらわなきゃいけないんだ」

珍しく声を荒げてクラスを静める担任に、教室は再び静まり返る。しかし、担任の表情はどこか穏やかだった。

「まあでも、お前らがきちんと約束を守れるだろうと想定して今回は起きた事だからな。まずは自己紹介してもらおうか。ほら、入って来てくれ」

その声と同時に扉が開いた。入って来たのは、白っぽい茶髪に高い鼻筋。横顔だけでもわかるそのバランスの良さ。身長は高く175cmは余裕であるだろう。同じ制服を着ているのに、まるでファッション誌から飛び出して来たような彼は、紛れもない朝のテレビで見た春川秋斗、その本人だった。

教室内から黄色い悲鳴が上がる。

「えっと、えーと……あの」

何か話そうとして、困ったように担任を見つめる春川秋斗。担任と見比べると、まさに月とスッポン、雲泥の差。

「お前ら黙れ！」

言い放った言葉で教室が静かになる。担任が目で促し、春川は小さく頷いた。

「初めまして……と言っても、クラスの中には何人か俺を知る人が居るかもしれませんが」

そう前置きして、緊張した表情を少し和らげる。

「春川秋斗っていいです。本当はちゃんと通ってた高校があったんですけど、今回のドラマで問題になっちゃって。これから、よろしくお願いします」
ぺこり、と頭を下げた。そよ風のような声。お辞儀したせいでわずかに流れた髪が、どう見ても綺麗に揃えられたようにしか感じられない。

「と言うことでだ。お前ら、この事は絶対に他言無用。保護者にはこっちから言うから、お前らは絶対に校外で口にしない事」

ざわめき、落ち着きのない教室に担任はどこか呆れたような表情を浮かべている。全く、とも言いたげに首を振って、今度は春川秋斗へ言葉を続ける。

「じゃあ春川。お前の席はここから見て、前から五番目、右から二番目あの席だ。隣に居るのは内藤叶波。分からないことがあったら聞くといい」

急に自分の名前を出され、ビクッと体が跳ねた。そんな様子は一切見えていないようで、彼は優しげな表情を変えずに「はい」と頷く。

クラス全体の一通りの自己紹介を終え、朝のHRがようやく終わった頃。一通りの質問タイムやクラス一人ひとりの自己紹介が終わり、彼もやっと席に着いた。その姿を思わず目で追ってしまう。

「よろしくね、叶波さん」

席に座り、いきなり横を向いてそんなことを言う。

「よろしく……えっと、なんて呼んだらいい？」

「秋斗でいいよ」

そう言って左手を伸ばしてくる。握手を求められているらしい。

「秋斗くん。よろしく」

僅かに緊張を感じながら、それに応えた。芸能人だからって緊張しすぎかもしれない。

「うん」と彼は笑って、少し恥じらうように「あのさ、後で学校案内してくれない？」と切り出した。

「え、あ、もちろん！でも先生は？」

「先生は忙しいから誰かに案内してもらえ、って」

「そうなんだ……でも私でいいの？」

「うん？うん。隣だし、優しそうだし。叶波さんならあの先生よりもちゃんと案内してくれそう」

その言葉に耐えきれなくなってしまう。つられたように秋斗くんも笑った。多分緊張してたのを見抜かれたんだと思う。でもそんな事はどうでも良くなるくらいには気分が楽になった。

その後も授業は移動教室であれば一緒に移動。他のクラスの人達も始めは秋斗に対して物珍しいように接していたが、六限が終わる頃にはその雰囲気は無くなり、クラスの一員として迎え入れていた。

「叶波一、帰ろ？」

「ごめん！今日秋斗くんの事案内しなきゃだから」

「へえー！そっかー！なるほどね！じゃ、楽しんで！」

「ちょっと！？そういうのじゃ無いんだけど！」
聞こえてるのか聞こえてないのか、友人はそそくさと帰ってしまった。ため息混じりに秋斗の方を向けば苦笑いされている。

「ごめんね、秋斗くん。じゃ、行こうか」

「ううん、俺が頼んだ事だから。明るい友達だね」

「明るいけど、明るすぎるっていうか……」

笑いながら言い訳のように呟く。振り回されることも振り回すことも多い友人だった。ふと、顔に影がかかる。それが秋斗くんの影だと理解するのに数秒

文芸部

もかからなかった。

「楽しそう」

「えっ？」

間抜けな声。楽しそう、の意味が理解できなくて、反射で聞き返してしまった。変わらず柔らかな雰囲気纏ったまま、秋斗くんは私の顔を覗き込んでいる。

「あ、っと。ごめん。案内しなきゃだね。行こう」

急に一人で思考を巡らせてた事が秋斗くんにはバレる訳もないのに恥ずかしくなって、話を急いで逸らした。

「うん。どこから行く？」

彼は頷いて、ついてくる。私と20cmは身長差はあるだろうか。大きさは全く持って逆だけど、それでも親鳥について行く雛のように、後ろを歩いてくる姿に何か温かなものを感じた。

「まずは教室案内から。移動してて分かったかもしれないけど、ここが3階で最上階。屋上もあるけど、普段は立ち入り禁止」

「屋上に出れる時もあるの？」

「うーん……防災訓練の時とか？あ、部活動でも出れるらしいよ」

「へえ〜！」

興味深そうに彼は声をあげる。

その後も3階、2階、と順々に案内していく。美術室に対しての反応は薄かったが、音楽室は少し楽しそうにしていた。わかりやすい。

「あとここが最後かな。保健室」

廊下に立つだけで保健室から流れ出た消毒の匂いがする。軽く頷き、中を覗く秋斗くんの姿に恋色メモリーの逢沢を思い出す。そういえば体育祭で怪我をして、背負われて保健室まで運んでくれるシーンがあった。思えば、音楽の授業が好きなのも逢沢の設定だった。

「秋斗くんって、逢沢くんに似てるんだね」

ふと、そんな言葉が口をつく。

「えっ、ああ、そうなのかな」

「あ、悪い意味じゃないよ！それだけ役に入り込んでるってことだと思うし！」

慌てて撤回する。さっきの発言に、少しだけ寂しそうな表情をされた気がして、でもそれは彼の優しい笑顔が一瞬外れたからかもしれない。ただ、もし気にしていたら、と考えが頭の中を巡る。嫌われたくない。

「私は今の秋斗くんが自然で好きだよ」

数秒の沈黙。とんでもない事を口走った気がする。

「あはは、すごい必死。気にしてないよ」

見透かされたような返答に顔が熱くなるのを感じる。

「そ、そっか……」

「まあ、なんていうか……案内してくれてありがとう。助かった」

変わらず笑顔を向けてくる彼は何か決めるように深く息を吸う。

「良ければ、一瞬に帰らない？」

外は蜂蜜と紅茶を混ぜたような甘い色の夕暮れに変わっていた。

「叶波さんって家、どっち方面？」

下駄箱にて行き先を確認される。結局一緒に帰ることになってしまった。いや、あの状況で断れるわけがない。二つ返事で頷いてしまったのだ。

「えっと、校門出て右行って……アスキニック社の支社あるのわかる？」

「ああ、分かるよ。ていうか、俺の家そこだよ」

「そうなの！？」

「うん」

トントン、と靴の爪先で地面を叩く音。ほとんどの生徒が帰ってしまった学校に軽快なこの音はよく響く。

「父さんの会社、アスキニック社なんだ。転校するの急に決まったからさ、とりあえずってことで今は社員寮の一室借りてる」

「社員寮ってあの中にあるの？」

「そう、あの中にあるんだ。わかりづらいでしょ」

「会社しかないと思ってた。私の家、そのビルの少し先なんだ」

そんな他愛のない会話でも家に着くまで話題が尽きることはなかった。気がつけば会社の前まで来ていて「また明日」と秋斗くんが手を振る。頷き返して、私も「また明日」と手を振る。

その日々が当たり前になるのに一週間もかからなかった。気がつけば既に一ヶ月も過ぎている。

今日もいつもの朝だった。

「おはよう、秋斗くん」

「うん、おはよう」

朝の挨拶が終わった頃、丁度チャイムがなり始め、教室の扉が開いた。「お前ら席につけ〜。よし、HR始めるぞ」

相変わらず怠そうに朝のHRを始める担任。

「あと最後に。そろそろ文化祭だろ。担当を決めて、準備は間に合うようにやれよ。以上。号令」号令の後、教室は少しのざわめきに包まれる。その中で文化祭グループのリーダーが駆けてきた。

文芸部

「叶波と秋斗くん！ごめん！頼みたい仕事あるんだけどいいかな？」

「いいよ」と、二人の声が重なる。それにリーダーの子も自分達も思わず笑ってしまった。

「息ぴったりすぎ。じゃあそんな二人に、外装のこれ作ってきて欲しいんだけどさ」

そう言って写真を差し出される。写っているのは木の板を組み合わせて作った簡易な台だった。設計図も資料にまとめてある。数枚めくっただけでよく分かる内容だ。

「作ってきて、という事は学校では作れない？」

「そうなんだよ。学校だと作れる場所がなくてさ。二人とも家近かったよね？」

確かに、家の間を行き来するには私たちの家は距離的にも一番行きやすい。

「私はいいよ。秋斗くんは？」

「もちろん、やろう」

あっさりと役割分担が決まった。授業時間が迫ってるのもあって、設計図だけ置いて行かれたような形になったが、それを読んでいて思う。これは秋斗くんの家に行くことになるんじゃないか、と。

「じゃあ今日の放課後、どう？」

案の定、家に行くことが決まった。しかも今日の放課後。毎日一緒に帰ってはいるけど、また家に行くことは違う。

「うん！やろう！」

でもそれを声に出すには恥ずかしくて、空元気になっていた。五、六限も集中出来るわけなく、ずっと文化祭のことを考えている。結局解決策も何も思いつかないまま、放課後になってしまった。

「帰ろうか、叶波さん」

「う、うん」

「どうした？元気ない？」

歯切れの悪い返事に小首を傾げる秋斗くん。「なんでもないよ」と笑うが、心配そうに顔を覗き込んでくる。言えるわけが無い、人の家に行くのに緊張してるなんて。ましてやその本人だ。腹をくくって、立ち上がった。文化祭の準備に行くだけだ、そう何度も自分に言い聞かせる。

アスキニック社の社員ゲートをくぐると中庭に続く道がある。その先、白色の石畳と木々で彩られた社員寮が存在する。

「うわ、凄……」

思わずその綺麗さに息を飲んだ。

「綺麗だよ、ここ。社員寮とは思えないくらい」

優しいそよ風が吹き抜ける。秋を纏う涼しい風だった。

「あ、そうだ。会社の人に言ってさ、作業部屋借りたんだ。俺の部屋だと狭いから作業できないと思うし」

「あ、そうなんだ」

内心ホッと胸を撫で下ろす自分がいるのを自覚する。それと同時に何か寂しいような気もした。ともかく、友人の家には上がらなくて済みそうだった。ただの友人なのに、これだけ緊張するのは謎だった。

「この部屋。これで入れるはず……」

カードキーを差し込むと機械音がして扉から鍵が解除される音がする。二人してせっせと運んできた素材を中に入れても十分な広さがある部屋だ。

「この部屋本当に使っているの？結構広いけど」

「いいんじゃないかな。俺もよく分かんない」

二人して顔を見合わせ「いっか」と笑う。小学校に戻ってイタズラを考えているみたいで少し楽しくなる。

「そこが60×90」

「おっけー、任せて」

次から次へと完成していく。

「よし、これで最後かな」

二人で何とか組み立てた台は素人にしては上手くできてる方だと思う。ハイタッチをして喜んでいる所にノックの音が3回響いた。

「なんですか？」

秋斗くんが扉を開く。女性の社員らしき人が秋斗くんの姿を見ると小動物のように体を跳ねさせた。

「あの、えっと、秋斗さん。お父様がお呼びです」

今にも消え入りそうな声。元から暗そうな印象を持たせる女性はそれだけ言うと部屋を小走りで後にした。

「なんだろう。ごめん、叶波さん。俺ちょっと行ってくる。この階なら好きに見て大丈夫だと思うから、暇だったら適当に時間潰してて」

「うん、気にしなくていいよ。行ってらっしゃい」

軽く頷いて部屋を去っていく影を見送りながら、どうしよう、と思った。気分はダンジョンの中を探検する冒険者のようだったが、一人になると途端に寂しさを感じる。

鞆からスマホを取り出すと時刻は18:00を過ぎる頃だった。親には遅くなると連絡はしてあるし、このまま帰る訳にはいかない。何かないと部屋を見渡せば、ゴミ屋敷一歩手前という感じだ。

「片付けよう……」

どうせ後で片付けることになるのだから、丁度いいと思った。工具などもかなり借りてきてしまったし、元あった場所は大体の見当がつく。

文芸部

段ボール箱の中に借りてきた工具をしまい込んで、薄暗くなったオフィスを歩く。この階層はほとんど使われないのか、あまり人ともすれ違わない。

「えっと、ここら辺」

独り言を言っていないと静寂に押しつぶされそうだった。スチール棚を開ければ、どうやら違う棚だったらしい。青色の分厚いファイルが押し込まれている。題名は『恋色メモリー 制作について』。その題名に目が止まる。止まらないはずがない。アスキニック社が支援していたという話は聞いたことが無い。これでもかなりのドラマ好きだ。スポンサーに居た会社なら何度も目にしている。ゴクリ、と生唾を飲んだ。悪いことをしていると分かっていたが、そのファイルに手を伸ばした。

《ドラマ企画 恋色メモリーについて
弊社開発の人型ロボット、通称アンドロイドを使用した感情の実験。目的としては、アンドロイドと人間の線引きが無い世界を目指す。
完全なアンドロイドとは、人だ。

今回の実験内容について。
今まで人がやってきた演技というものをアンドロイドにやらせる事で、感情のアウトプットを擬似的に行う。感覚を覚えさせる事で現実世界でも同様の事が可能になる。
ドラマ企画成功後、実際の高校生活に送り込む。

実験過程で対象のアンドロイドを厳選。廃棄は本部にバレないように済ませること。

対象のアンドロイド名は「春野秋斗」《

夢中になって読んでいたファイルに影が落ちる。気がついた時には遅く、目の前には男性が立っていた。

「あの、これは……」

何とか言い逃れようとして、言い訳を探す。

「君は、叶波さんかな」

自分の名前を呼ばれてはっと顔を上げた。眼鏡をかけた優しそうな男性だった。

「初めまして。秋斗の父親です。立てるかい？」
そう言って手を伸ばしてくる。彼に父親などいるんだろうか。あの資料の通りなら彼はアンドロイドという事になる。

「そのファイル読んだんだね。なら話すべきだな」
父親を名乗る男性は近くにあった椅子を引っ張り、座るように促す。私が座るのを確認すると、男性は小さく頷いた。

「まず、初めに。私は春野浩司といいます。そして、今回の件に巻き込んでしまってすまない。私から謝らせて欲しい」

「えっ、何を」

深々と頭を下げる春野浩司という男性に何も言えなくなる。まだ意味がわからない。巻き込まれたような感覚すらない。

「そうだな、少し話を聞いてもらえるかな」

私は頷く。拒否する理由はなかった。

「そのファイルに書いてある事は本当だ。秋斗は人間じゃない。私たちが作ったアンドロイドだ。恋色メモリーは知ってる？」

「はい、もちろんです」

「うん、なら水原伊津美という女性は？」

なぜここでアナウンサー水原伊津美の話が出てくるのかわからなかった。けれどそれを疑問には出せる勇気はない。

「知っています」

その返答にまた軽く頷く。

「本来なら水原伊津美は恋色メモリーのヒロイン役をやる予定だったんだ。だから、秋斗には恋愛感情を水原に向けて作成してある。けど、そうはならなかった。実験はそこで中止にするはずだったが、秋斗は完璧な演技を披露した。感情を持つんじゃない、演技することを先に習得したんだ」

一つ、深い深呼吸する音。

「私達の目的はアンドロイドに感情を持たせることだ。演技するロボットを作ることじゃない。だから、秋斗に友人でも出来れば感情が観測できると思って高校に送り込んだ。まさか、好きになってくれる人ができるとは思わなかったけどね」

目の前の男性は優しげに笑う。子どもの成長を慈しむ父親のような表情だった。

「自分がアンドロイドだって事を秋斗くんは知っているんですか」

「知っているよ。計画のほとんどを彼に話してある。それでいて、彼はまだ水原の事を忘れられていない」

忘れられていない、その言葉に胸が針で刺されたように痛む。薄々気づいていた、私は秋斗くんが好きだということに。そして、秋斗くんは私を友人としか見ていない。黙ってしまった私を見据えてか、春野浩司は再び口を開く。

「だからね、君たちに決めて欲しいんだ。時間はある。ゆっくり考えて欲しい」

文芸部

何も返すことが出来なかった。その後は秋斗くんに会うことはなく、会社の外まで送ってもらった。夕暮れの空はすっかり暗くなり、重たい雲に都会の光が反射されて灰色の空を作り上げている。それでも次の日は当たり前やってきて、今日もいつもの通りの日のようにHRが始まった。HRの話はほとんど聞いていなかったが、秋斗くんが前へ出て「一週間後、転校」という言葉だけがはっきりと分かった。ざわめく教室に圧倒されて、一瞬だったなと呑気な事を思ってしまう。一週間、何も変わらずに接しようと決めた。決めたのに会話をするたび苦しくなる。これが何のせいなのか、もう分からなかった。

文化祭当日。あの日から一週間経っていた。朝から秋斗くんはいなかった。いつものように生活しなくても経過する時間は変わらない。教室では二人で作ったあの台が使われていた。居なくなった彼の枠は既に誰かが代わりに仕事をしていて、友人でも一番の関わりがあったのは私だ。「最後に文化祭くらい見ていけば良かったのにね」誰かがそんな事を言った。この学校で彼の家を知っているのは私だけだ。そんな思いが湧き上がって、居ても立っても居られなくなる。気がついたら走り出していた。白い石畳の道、生い茂る木々。あの社員寮だ。そこに、彼は居た。「秋斗くん！」肩で息をしながら叫ぶ。霧雨が火照った体を冷やしていく。「叶波さん」一瞬、驚いたようにこっちを見てそれでもすぐにいつもの優しげな表情に変わる。

「どうしたの？今日は文化祭でしょ？」顔が見れなくて思わず下を向いた。胸いっぱい空気を吸って、圧迫される胸の痛みを自覚する。「転校なんて嘘なんでしょ」何の返答もない。「本当は壊されちゃうんじゃないの。もう実験が終わるから」「なんで」「秋斗くんのお父さんから聞いたの。本当は秋斗くんは人間じゃなくてアンドロイドなんだって」続こうとした言葉を無理やり遮る。声を聞くだけで何も喋れなくなりそうだから。「逢沢役は完璧だったけど、アスキニク社の求めている結果とは違ったんでしょ。だから、壊されちゃう」腹をくくって顔を上げた。そんな辛そうな表情をしないで欲しい。「秋斗くんは感情が表に出やすくて、学校案内してる時も文化祭の準備してる時も楽しかった！逢沢でもないし、秋斗くんは秋斗くんでしょ」雨の強さが増していく。傘もなく頬が濡れて行った。「私、秋斗くんのが好きだよ」初恋で、一番最初の告白だった。けれどその言葉に、彼は変わらず優しげな笑顔を浮かべて「ありがとう」と笑っただけだった。

ドラマとは、劇のこと。演劇ももちろんそれに含まれる。結局、私には彼の心が演技だったのか真実だったのか、未だに分からない。

終

文芸部

異邦人

「良い時代になりましたね」

「良い時代」

私は先生の方に向き直って、その言葉を復唱した。先生は、眩しそうに目を細めながら、カーテンの隙間から漏れ出す陽の光を浴びている。

「ええ、そうです。君たちが生きるこの時代は、思っているよりもずっと、良いものですよ。分かりませんか」

そう答えて私の顔を仰ぎ見たかと思えば、幾度か目をぱたり、ぱたりと瞬かせて、満足そうにも、哀しそうにもとれる表情で笑うのだ。彼が笑うと、目尻が皺苦茶になって、それが私はあまり好きではなかった。あの日の若々しく、全身からエネルギーが溢れていた端正な青年が、年老い弱る姿は、否応なしに時間の流れを理解させられてしまう。見えないところから伸びてきた手が、私の肩を激しく揺さぶって、いい加減早く現実を見やがれと恫喝するので、私は益々自分の殻に閉じこもってしまいたくなった。

「分かりません」

「そう。そうですか。でもね、こればかりは仕方がないでしょうから。過去の人間の気持ちなんて、理解できなくて当たり前だ」

「どうして良い時代なんですか」

私はどうにも苛立って、追い立てるように問う。先生は少し困ったように笑って、それが私の胸の痛みを一層強めた。

「どうしてって、君、そりゃあ、物が溢れた世の中は豊かだ。豊かさは良い物でしょう」

「先生はそんな俗物的な人じゃない」

諦めたかのような、呆れたかのような、大きな溜息が先生の口から漏れ出る。私の身勝手さに参ってしまった先生は、私から視線を逸らし俯いた。それでも私の口からは、際限なく言葉が溢れていく。言いたくなかったこと、言うべきでないことまで。

「先生は、先生はそんな人じゃない。先生は……」
声が震えて、目頭が熱くなる。どうしてこんなにも苦しい、悲しい。どうして。こんなに……。 「……君は私に何を求めているんですか」

「何って……」

「君は私を何だと思っているんですか。私をどう思っているんですか」

「……」

不思議だ。その声には怒気が込められて、それでも表情は優しく、哀しげなまま。どうすれば良いのか

滯標

分からなくなり、唇を噛んで押し黙る。何だと思っているのだと聞かれれば、現代で最も偉大な音楽家であると、どう思っているのだと聞かれれば、誰よりも尊敬していると、いつもの私なら何の気無しに答えられた。だが。先生が求めている答えは、そういうことではないのだということだけ、私には理解できていた。

「私を何だと思っているんですか、君。私は人間ですよ。欲があれば醜くもある、普通の人間です。私のことを、何か高尚で、俗世間から離れた者だと思っているなら、それは違う」

「でも」

「でも、ではないんです。仮に私がそうであったとしても、今は違うんです。私も昔は音楽に取り憑かれた獣でしたが、今は何にも手をつけられなくなった、何にも情熱を燃やせなくなった腑抜けです。音楽家の私はもう死んだと思いなさい」

「でも……！」

「君」

厳しい張り詰めた声に、思わず肩を竦める。先生は怒っていた。あの温厚な、海のように穏やかな先生は、誰が見ようとわかるくらいに、怒っていた。

「少し頭を冷やしなさい。私が君の気に触ることを言ったのは悪かったけれどね、私だって。自分を勘違いされるのは気分が悪いよ」

怒っている時でさえ、先生は優しい。私を一方的に悪くは言わないし、正当性を持ってでしか私を責めない。しかし今はそれが返って、私を苦しめた。先生は正しいことを言っているということは、自分でもきちんと理解できる。それぐらい、私は大人になってしまったのだ。それが苦しくて、泣き出しそうになって、また言葉を失った。決して、正論を言われたから悔しくて黙り込むのではなく、ただ、私が先生の言葉に対し、子供のように我儘で自分勝手な自論で返すことが出来なくなってしまったことが悲しいからだ。大人になんてなりたくなかった。私が大人にならなければ、先生もまだ若くて、ピアノが弾けて、作曲もできて、第一線で活躍し続けるアーティストのままだったはずなのに。彼の顔を直視することができずに、そのまま視線を下げる。先生の、もう動かない脚がそこにはあった。座り心地の悪そうな、薄い車椅子に乗った細い下半身。きちんと磨かれた革靴にしゃんとしたスラックスを身につけているのが、やけに哀れに見えてしまう。

文芸部

とうとう眼から大きな雫が二粒、溢れ出て、どうにもできずに呻き声を絞り出した。先生は、驚いて私の頭に手を伸ばし、そっと髪を梳いてくる。

「……私も意地悪でしたか」

「ち、がいます」

何度もかぶりを振って、必死に否定した。先生は、哀しそうだった。先生が苦しんでいること、哀しんでいること、何を思っているのかも、私は何一つ知らないけれど、今だけは、私のために哀しんでいるのだということを理解できた。優しい人。できれば笑顔だけを見ていたかった人。その笑顔が煩わしくて、次第に心が離れてしまう。それが、どうしようもなく哀しい。私はどうすればいいのだろうか。何も、分からなかった。

「先生、先生……どうして、音楽をやめたんですか。先生が音楽家として死んだって、じゃあどうして今が良い時代なんですか。先生のいない音楽界なんて価値はないでしょう。先生が死んだなら、音楽だって死にました」

先生のピアノが好きだ。先生の曲が好きだ。先生の歌が好きだ。先生の音楽が、その全てが好きだった。他の音楽などを、好きになれるはずもなかった。私はずっと、先生の音楽に恋していたのだ。愛だと言っても良い。私には、それしか見えない。見ようとしめないから、見えないままで良い。

「私はもともと立派な人間ではありません」

「立派ですよ。私にとっては、立派なんです。先生にとってはそうじゃなくても」

先生は、閉口した。私を宥めようにも、何かを言えばすぐに私が反論して、またさらにひどく愚図るものだから、すっかり黙り込んでしまった。私は顔を上げて、先生の瞳を真っ直ぐに見つめる。昔から視力が良く、また老眼もそれほど進行してはいない。健康体そのものの瞳であった。先生の耳を見る。先程からずっとまともにやり取りをできていて、会話に困ることなどない。異常など何一つない耳であった。先生の指を見る。長年ピアノを弾き続けたその白く長い指は、腹が固まり豆が潰れた痕がいくつも残っている。音楽家の、尊敬すべき指であった。

「……どうして音楽をやめたんですか、まだできるでしょう。脚が動かないだけなんでしょう。何故ですか。どうしてですか」

「はい。はい……私は、もう音楽に対する情熱を失いました。いえ、元からそんなもの持っていなかったんです」

「そんなことは」

「あるですよ、君。私は元から音楽なんて好きじゃなかった。体を自由に動かさなくなってから、

やっと気がつきました。ピアノの鍵盤に手を伸ばすより、本棚から本を取る回数が増えたのは、私が音楽を面倒がったためです。音楽を面倒だと、不要だと感じた瞬間、音楽家は死ぬんです」

先生は穏やかでも、音楽に関してだけ言えば、修羅の人だった。音楽以外が見えていなかった。音楽以外に興味がなかった。音楽が、彼にとっての光であり酸素であり水だった。そんな彼が、音楽を好きじゃないなんて、そんなことがあるはずない。私は顔を顰めて、先生から顔を背けた。またはぐらかされているのだと勘違いした。

「君、ちゃんとこっちを見なさい。君が聞いたことだ。私の目を見て聞きなさい。これに関しては本当だ。本当なんですよ。私は確かに音楽そのものは好きです。愛しています。けれど、自分がやるとなったら話は別だった」

厳しい声で言いながら、先生は優しく私の頭を撫でる。今にも泣きそうな顔で、私を見つめていた。

「私も勘違いしていたんですよ。音楽が好きなんだって、生涯を捧げるのに何の躊躇いもないって。でもね、勘違いだったんです」

ざあっと風が吹き抜ける。まだ冷たい、初春の湿った空気が巻き上がって、私たちを包んだ。先生は上着を側から取り上げて羽織ってから、また私を見て、言う。

「……良い時代ですよ。ほら、新しい音楽の形がいくつもあるんだ」

音量の抑えられていたテレビには、今人気のアイドルグループが映っている。私にはどうしても俗っぽく、幼稚に感じられるが、先生はきらきらとした目でそれを見ていた。その輝きには、確かな音楽への情熱が灯っている。

「あんなの音楽なんて言えるんですか」

「音楽ですよ、あれも。音楽は高尚なだけじゃないんだ。読んで字の如く、人を音で楽しませるのが音楽です」

私は黙って、楽しそうな先生と一緒にテレビの画面を見つめた。天才だけでなく凡才も、一緒くたになってもみくちゃにされ、その中で必死に掴み取った栄光を、彼らは誇らしげに掲げている。

「良い時代ですか」

「良い時代ですよ。加えて、君が、君だけの音楽を作るのなら、もっと良い時代になる」

「私だけの」

「そう、君だけのです」

先生は笑った。修羅の面影は既になく、ただ純粹に、音楽を愛する人がそこにいた。

終

ヴィーナス・マードー・メランコリー！ 暁

甲高い女性の声が響く。周りに助けを求めようとして、しかしその口からは意味ある言葉が滑り出ることではない。パニック状態になって荒い息ばかりを吐き出しながら、ぼろぼろと涙を流していた。その作画は素人目から見れば流麗で淀みなく、少なくともネット上で「雑」などという烙印を押されることはないだろう。まあ別に、このアニメの作画が良からうが悪からうが、全く関係のないことである。そう、原作者にとっては。巳嶋憲昭、もとい作家巳嶋浅葱は、スマートフォンの小さな画面に映るアニメ映像をぼんやりと見つめながら、皿に残る鮮やかな色のプチトマトをフォークで転がした。昼下がりのあまり人のいないファミレスで、こうして長閑な春の陽射しを大きな窓を通しいっぱいに浴びている。そんな巳嶋を、どうしても怒鳴りつけてやらねばならない理由が私にはあった。私が立ち寄ったファミレスの店内に巳嶋の姿を見つけたのは全くの偶然である。彼を探しにきたのは確かなので多少語弊があるかもしれないが、それでもこんな場所に彼がいるとは考えられなかった……もとい考えたくなかったのだ。私は荒ぶる激情を何とか抑えつつ、ゆっくりと彼の座る71番テーブルに向かい、思い切り怒鳴り散らした。

「巳嶋憲昭！ 貴方またこんな場所で堂々とサボりとは良いご身分ですねえ！」
その時の、客や店員、そして当の本人、巳嶋の驚きと言ったら、なかった。怒りに支配されていた私は、そんなこと気にする余裕もなかったが。

「そろそろ許してくださいよお、傘寿さん」
巳嶋は猫撫で声でそう言いながら、恐る恐るといった風に机の前で仁王立ちする私を見上げてきた。その様はさながら震える子猫のようにも見えるが、本性は六週連続締め切り破りをしでかした悪魔なのだ、流されてはいけない。作家を担当する編集者にとって死活的な問題は何であるか、もちろんそれは締め切りまでに原稿を取り立てられるか、否かだ。それを六度も失敗しては、私の給料どころか今の地位さえも中々危うくなってくる。職を追われるのだけは御免被りたい。前任の担当は幾度となくこの男のサボり癖に発狂させられ、苦しめられてきた。後継に私、傘寿蘇鉄が抜擢された時は、この世の終わりを悟ったものだ。何もかも懐かしい。たった数年以内の出来事であるのに、妙に長い間彼にこうして怒声を浴びせ続けていた気がする。私はじっと眼下

に悪魔を見据えながら、進まない手に無言で抗議を表しながら感慨に耽った。彼の書く物語は、中々面白い。今季話題のアニメ「宵の明星」原作の同題小説は彼が作り出した大ヒット作で、私の一番のお気に入りでもある。だからこそ新作を出してほしいという、若干不純な思いも混じっていることは認めよう。それでもとにかく、次の原稿をさっさと仕上げてほしいのは確かなのだ。未だ動かない骨張った白い手を睨みつけつつ、さてここからどう机に向き合せ続けようかという算段を練り始めた……しかしそれも全て白紙になる。

いや、一体どこの編集者が、数秒後刑事が突然現れて任意同行を求むなんて言いながら有無も言わず作家を連れ去っていくかもしれないなんて考えるのか？ 少なくとも私は考えなかった、貴方もきっと無理でしょうよ。とにかく、私は彼と別れてしまったので、ここから先はこの事件の後、彼が話してくれた取調べの内容を記載しようと思う。巳嶋は目つきの鋭い中年の刑事に、時々睨まれながら市内の警察署まで連れられた。それで、この日のこの時間帯は何してたかなんてことを詳しく聞かれ、最後に、先週の火曜日午後5時頃、市民館裏の道路付近でうろついていたよな、と念を押すように聞かれたと言う。特に隠すこともないので市民館に行った覚えはあると答えたところ、一枚の写真を提示された。そこに写っていたのは、巳嶋の元担当編集であったのだ。

「お知り合いで間違いありませんよね。彼、実は亡くなっていたのですが、ご存知で？」

「初めて知りましたねえ、どう殺されたんですか？」

巳嶋がどうしても良さに生返事をする、刑事はフンと鼻を鳴らし、椅子の背もたれに大きくもたれかかった。

「私は『殺された』とは一言も言っておりませんが」

これには、巳嶋も失笑した。馬鹿な刑事である……これは、巳嶋の発言をそのまま引用しただけであり、私には彼を貶す意図は一切ない。巳嶋はそのまま彼特有の小生意気なニタニタ笑いを浮かべながら、少し身を乗り出した。

「刑事さん、こんな状況になったら誰でも『おや、これはまさか殺人事件の容疑者にされているのかな？』なんてこと考えますよ。実際どうなんですか？ 僕が殺したってことになってんですか？」

文芸部

ジッと刑事の鋭い瞳をいやにじっくり見つめながら、巳嶋は笑う。やけに場慣れしたような雰囲気があったのは、きっと数々の修羅場を潜り抜けてきたからだろう。多分私が怒鳴った時の方が、彼はもう少し、しおらしくしてくれる。刑事は苛立って舌打ちをし、薄くなった頭頂部を掻いた。

「現場近くでの目撃証言があります、それに貴方には動機もあるでしょう。彼が恨めしかったのでは？ 貴方が締め切り破りの常習犯で、彼が幾度となく悩まされてきたのは周知の事実でした」

これに関しては私も激しく頷きたい。しかし、それごときを気にするような巳嶋憲昭ではないということも、伝えておきたい。そんなのは動機にならないだろう。彼が人を殺すとすれば、今書いているトリックが本当に実現可能なのか試したくなかった時くらいではなかろうか。読み通り、巳嶋はまた気のない返事をした。

「いやあ、その人にあんまり興味なかったですね。名前も覚えてません。村田さんでしたか？」

「……町浦さんですよ」

これではあんまり町浦が救われないので、代わりに私が弁明しておく。彼は巳嶋さえ関わらなければ、温和で人当たりの良い人物であった。今度彼の墓前に花を手向けて謝罪しておこう。それはそれとして、刑事と巳嶋のやり取りは愉快なのでもう少し続けても良いかもしれないが、さっさと話を進展させたいと思う。刑事はしばらく話した後、巳嶋の「容疑者は僕だけなんですか？」という問いに、少しだけ迷った後写真を今度は二枚取り出した。刑事は「貴方もこの中の一人になるんですよ」と言いながら、さっさと写真を撮って指紋の採取も済ませてしまった。巳嶋は空きの時間に他の容疑者二人の写真をもう一度じっくりと見てみることにしたらしい。刑事がぶつくさと「どうしてこう誰も彼も」とか何とか呟いているのを聞きながら、二枚の写真を机の上に並べてみた。片方は面識のない女、もう片方は知り合いで、巳嶋の同業者の男だ。名は見谷澤。彼は書く作品こそまあまあ面白いが、口を開ければ若手への嫉妬やら担当編集の不満やらが止めどなく洪水のように溢れ出てくる。2時間も共にいれば巳嶋のような人間以外は全員ノイローゼになってしまうだろう。確か町浦は過去彼の担当も担っていたことがあったはずだ。金銭トラブルか何かで揉めて、面倒事を起こしたくなかった出版社は二人を引き剥がした。しかし、私がまだ新人だった頃の話なので、今更それが蒸し返されるということも無いだろう。それにあの刺々しいが妙に冷静な男が殺人を犯すとはどうも思えない。女の方は冷たそうな顔立ち、年増だが美人で、どこかで見たことがある顔だったと

巳嶋は言った。しかしとにかく、刑事が納得するかどうかは置いておいて、その時点で私の中では犯人は決まってしまったようなものだった。私は知人と会って話をしてから、数時間後解放された巳嶋を迎えに行き、少し早いと共に飯を食いに行った。巳嶋の話の聞いている間は、冤罪だとかそういう単語が頭の中をグルグルしていて、指先が冷え酒ばかりが進んだ。巳嶋は全く気にしていない風で、むしろ私の様子ばかりを伺う様子を見せる。「私が不在の間は何を？」

「仕事を済ませて……少し人と会っていました」

「ご家族ですか？」

すかさずそう聞かれた瞬間、私の背筋にはゾゾゾと這い上がるような悪寒が走った。というのも巳嶋の言う通り、私が会っていたのは近郊に住む身内なのである。監視でもされていたのか、と末恐ろしくなり、私はすぐに話題を逸らした。彼はそれでもずっと、私をまっすぐに見つめていた。その瞬間、カチリ、と時計の針が進み、午後6時を指す。明るい間の抜けた音楽がかかり、アニメのタイトルコールが店内に響いた。

「おや、見れましたねえ。今夜のは録画したのを見ようと思いましたが」

『宵の明星』か、と思い、隅の方に取り付けられた小さなテレビを仰ぎ見る。自分が書いた小説のアニメ版なんか見たって何が面白いのかと思うが、きっと何かが違うのだろう。私は頬杖をついて、彼と一緒にテレビを見つめた。

「町田さんも気の毒でしたね」

どうしても良い世間話のように巳嶋が言う。私は苦笑いして、すかさず訂正に入った。

「町浦さんです……でもまあ、後ろからグッサリとか、痛いし怖かったでしょう」

巳嶋は笑って、私をチラチラと見てくるのをやっとやめてくれた。ただトントんと机を規則的に叩き、何か企んでいるようにニヤニヤ笑う。妙に長い夜だった。あんまりにも長くて、気が触れそうだった。私はその後7時過ぎ頃、寄り道をしてから家に戻った。その数時間後、私は病院に救急搬送されることになる。

「おはようございます、気分はどうですかぁ？」

「……最悪です」

微かに記憶に残っているのは、己の血みどろになった手と、驚いたように覗き込んでくる巳嶋の顔、そして酷く寒かったということだけだ。医師から聞かされたのは、後数センチずれていたら死んでたとか、発見が遅くても死んでたとか、そういうこと。背筋がヒヤリとしたが、もう生き残ってるしな、と

文芸部

思うとすぐけろりと気にならなくなった。取り敢えず私を発見してくれた巳嶋には感謝したい。私は、死にかけていた。脇腹の刺し傷はおよそ10センチに及び、加えてまだ冷たい四月の川に全身浸かって漂っていた。電話に出なかった私を探しにきた巳嶋がいなければ、私は今頃亡き者になっていただろう。恐ろしいね、全く。その後すぐ刑事が押しかけてきて、事情聴取を受けた。まあ大体察しは付きますが……と付け加えられて。どうしてこんなことになったのか、私が刑事に話した内容をそのままお伝えしよう。私はあの日の帰り、たまたま見谷澤の犯行の決定的な証拠を見つけてしまったのだ。そう、件の町浦殺害である。彼が固まった血のこびりついたナイフを、人気のない空き地に埋めようとしていたのを目撃してしまった。それで揉み合いになり、ナイフを向けられたので、流石に逃げた。体術の心得はあるものの、素手でナイフに挑もうなどという無謀な考えには至らなかった。走って、走って、川べりにまで辿り着いてしまうと、もう逃げる場所がなかった。その為儘よと思い飛び込もうとしたが、何にせよ春の夜というのは寒いので一瞬逡巡してしまい、後ろからグッサリ。死んだ、と思った瞬間私は見谷澤の服を掴んで、背中から土手の下に、二人仲良く真っ逆さま。そのまま頭を強かに打ち、私は意識を失った。それが私が彼らに話した全部である。恐らく見谷澤も同じく頭を打ったのか、二人とも気付かない内に川に転げ落ちてしまった。見谷澤の方は打ちどころが悪かったらしく、即死だったそうだ。

「思わぬところで犯人が見つかってしまいましたなあ」

後ろにあの目つきの悪い刑事を控えさせながら、幾分か位の高そうな壮年の男が頭をかきながら言う。私はゆっくり頷いた。

しばらくして刑事がいなくなると、巳嶋は見舞いの林檎を剥き始める。上手いものだなと関心して見ていると、彼は少し笑った。笑うと言っても、微笑みとかはにかみとかそんな可愛いものではない。まさしく悪魔だ。悪魔の笑みだ。

「で、ご気分は？」

「はい……？」

ニヤニヤしながら巳嶋が聞いてくるので、私は首を傾げた。やはり、この男は恐ろしい。何を考えているのかが全くわからないということが、恐怖でしかないのだ。特段、碌でもないことを考えているという一点だけはわかるということが彼への恐怖心を煽る。額に冷や汗が伝い、眉間に皺を寄せた。彼の柔らかな唇が弧を描き、隙間からちらりと白い歯が覗いているのが、嫌によく見える。

「ですから！ どう思ってるんですか？ 人を殴り殺して刑事を騙し、自分の命を賭けた大博打に勝利した結果を」

私は、ぱっちりとした睫毛に縁取られる大きな眼を驚愕して見つめた。またカチリと時計の針が進む。最終回直前、これまでのあらすじをダイジェストで紹介！ と高らかに宣言するナレーターの声がテレビから聞こえてきた。また、『宵の明星』である。鮮やかな夕暮れ空が画面いっぱいに映り、第一話が流れ始める。ついに気が狂ったと思った。

「最初におや、と思ったのはね、傘寿さん。容疑者の一人の女の人でした。流石に名前は教えられなかったので、憶測でしかなかったんですけど」私は巳嶋がつらつらとそう言うのを、穏やかに見つめていた。先程の動揺など無いものとしているかのように、自分でも何故こんなに冷静でいられるのか分からない程だ。もっともそれは、彼の襟首を掴みいつでもお前を絞め殺せるぞという脅しの片腕を目の前に振り翳していたからだだったが。そうでもしないと落ち着くことができなかった。しかし巳嶋は、全く気にしていないように続ける。

「あなたに似てるんです、傘寿さん。もしかして彼女はあなたのお姉さんじゃないですか」

私は黙ってゆっくり頷いた。そうして続きを促す。

「そして『後ろからグッサリ』と言う発言です。私は町なんたらさんの死因については、何も知らされていないし言ってもいない。どうして知ってるんだと思いましたよ。そしてあの時あなたはなぜか酷く動揺していた。……お姉さんと会ったのが原因だったんですよ」

喉がカラカラに乾く。瞬きの回数が増える。自分の挙動だけでここまでバレていたのだ。非常に不味い事態に陥っていた。

「極め付けは私が発見した時のあなたです。血塗れでびしょ濡れなのに加え、土で大分汚れていた。別にそこはおかしくないんですけど、爪の間にまでびっしり土が挟まってしまっていたのは妙でしたねえ、何かを掘っていたかのような……ここからは、私の予想です。間違っても一応最後まで聞いてくれますか？」

私は尚も黙っていた。それを見た巳嶋も、同じく黙った。瞳がゆっくりと背後に向き、意識を病室入り口の扉に向けているらしいということが分かる。その扉の前に刑事を控えさせているのか、はたまた誰かに聞かせたくないと思っているのか、私にはどちらとも取れない。だが彼はやはり、異様に落ち着いているということだけ理解できた。やがて彼はゆっくりと口を開き、こう切り出す。

文芸部

「あなたは、お姉さんから自分が犯人であると、自白された」

「違いますッ！姉は」

「しー！誰かに聞かれちゃいますよ！」

予想し切っていた誤解に思わず声を荒らげる。しかし巳嶋にずいと口元に人差し指を突き立てられ、すぐに口をつぐんだ。彼は後で聞きますからね、と言いき、続けていく。

「それでですね、死因やら凶器の隠し場所やら、諸々教えられたあなたは、そう請われたにしろ自主的にしろ、すぐに行動した。凶器を掘り返してから、もう一人の容疑者を呼び出して後頭部を殴り撲殺……この時点では死んでいなかったかもしれませんがね。そして自分の背に凶器を突き立て、頭を強く打ちつけた。死を覚悟しながら。……まあ、もっと他の良い方法を取ったかもしれませんが。実際やったなら狂気の沙汰ですよ。でも、あなたの主張ではこれは間違っている？」

べらべらと、よく回る舌である。静止しようにも全く止まらない。自分に話を振られて初めて、反論を述べることができた。ゆっくりと深呼吸し、自分を落ち着かせてから、話し始める。

「……姉はやっていません。死因や凶器の隠し場所を知っていたのも全くの偶然だ。見谷澤がやったのは確かです。自白は聞き出せませんでしたでしたが……その、彼女を守りたかった」

「ええ、ええ、それは知ってるんです。で、方法は？」

このクソ野郎めと、心の中で小さく悪態をついた。この野郎、完全に面白がってやがる。次の新作のネタは俺にするつもりだ。この際はっきり言ってしまう。この男はサイコパスだ。小説のことしか考えていない。全てを面白いかそうでないかでしか見ていないのだ。苛立ちがどんどん降り積もっていき、私は投げやりになってきた。

「あなたの言った通りですよ……！見谷澤を川べりに誘い出して、少々揉み合った後気絶させて、それで地面に頭を思い切り打たせて殺しました。それでその後、掘り出したナイフを使って柄にだけは指紋がつかないようにして……少し手間取りましたが自分で刺しました。私まで頭を打ったのは計算外ですけど……。痛みで足元を滑らせて、そのまま私も土手の下に落ちて。気絶して川に流されました。本来は揉み合ってるうちに刺されて、勢い余って彼を突き落としたことにして、正当防衛にしようと思っていたんですが……」

そこまで言って、目線を上げる。そして巳嶋の顔を見て、思い切り舌打ちをした。満面の笑みだ、気持ち悪い。

「なるほど、なるほど！ふふ……そうですかあ、それはとても！素晴らしい！ねえ傘寿さん、教えてくださいよ。姉の無実を信じてるっていうのに、どうしてそんなことしちゃったのか！」

「はあ……！？」

「だってそうでしょ！本当に無実ならそんなことする必要ないですもん！信じて待ってればその内真犯人逮捕されて良かったねで終わりますよ。けどあなたは行動した。姉を守るために。傘寿さんあなたは、信じていても信じ切ることはできなかった訳だ！」

巳嶋は興奮したように捲し立てる。その瞳は爛々と輝いて、覆い被さってくる勢いで身を乗り出した。私はただただ、その様に引いていた。気色悪いと思った。

「傘寿さんって結構熱い人ですねえ！愛のためになんでもする！命も賭けちゃう！すごいなあ！」
僕には真似できない、と言った。真似なんかするなと思った。自分の愚かさを愉快そうに興奮して伝えられて、よりによって最愛の姉への不信感を暴かれて、私は死にたくなかった。恥ずかしくて恥ずかしくて、自分が許せなくて、とにかく巳嶋を殺したい。そう思う。フツフツと煮えたぎるようなそれは、今まで彼に抱いた中で最も大きく、そして異質の殺意であった。

巳嶋が私の言動から私の犯行を察したように、私は姉の言動から致命的な勘違いを犯した。「後ろからグッサリいかれたらしいわ」「川近くの空き地に……ううん、何でもない」、そんな言葉が私を必要以上に惑わせて、つい確かめてしまった。まさか、本当に凶器が出てくとは思わなかった……もとい、思いたくなかった。もしかすると、彼女は心のどこかで私に何とかして欲しいと思っていたのかもしれない。警察にも頼ることができなかったから。姉は、殺したわけではなかった。やはり犯人は見谷澤で間違いなかった。「後ろからグッサリ」と、凶器の隠し場所を知っていたのは、彼女が犯行の目撃者の一人だったからであった。私は死にたくなかった。姉に全てを話し、土下座した。許してほしい、いや許されることでないとわかっている、だが、でも、許してほしいのだと。姉は見谷澤と以前恋人関係にあったが、彼からひどいモラハラを受けて心に傷を負い、すぐに別れた。そんなことさえ、私は知らなかった。見谷澤がトラウマだった姉は、それでも勇気を振り絞って全てをその目を見た。殺す瞬間、凶器を埋める瞬間も。しかし復讐を恐れ、見谷澤の名前を出すことさえ怖がって警察に告発することができず、あろうことか現場にいたことや

文芸部

町浦と接点があったことから自分も容疑者の一人に数えられてしまった。そうなっても尚、言うことはできなかったのだ。見谷澤が町浦を殺した動機はしばらくして分かったらしいが、事件のことをもう思い出したくもなかった私は、それをまだ知らない。金銭トラブルが蒸し返されたか、もっと別の理由か。どうせ下らないことだ、あの男のことだから。私は今もまだ、巳嶋の担当編集を続けている。結局誰も私を告発するものはいなかった。自首しようかとも思ったが、勇気が出なかった。自分がこんなにも臆病だということを、私はその時初めて知った。今更私がこんなものを書いているのは何故か、それは懺悔である。先日姉が結婚した。今度こそ幸せになってほしいと思った。私は罪を抱えて生きる。人を殺した、見谷澤と同類だ。ひどいエゴイストになってしまったことを、また姉に謝りたい。私は彼女だけには、笑顔で健やかにいて欲しい。最後に私は、ふと『宵の明星』のことを思い出した。ヒットの熱りが覚め、しかし未だあの作品は一番の大ヒット作である。だがきっと最高傑作ではない。あれは、OLが金星人と出会うというよく分からない話だった。一番よく分からないのは、その金星人だ。大真面目な顔で冗談めいたことを言ったり、よく分からないタイミングで泣き喚いたり、躊躇なく人を殺したり、妙に落ち込んだり、かと思えば次の瞬間には大笑いしていたりする。人間と同じように、コロコロと表情が変わって、だがそのトリガーがどうもよく分からなくて不思議なのだ。私はずっと、あれは巳嶋が自分自身を投影して書いたものだと思っていたが、今になっては違うと思う。あれはきっと、巳嶋から見た「外国人」だった。いや、「外星人」の方が言葉としては合っているかもしれないが、きっと巳嶋は多分あの金星人を「外国人」程度

にしか思っていないのだろう。金星人は、持っている文化が違うだけで、きっと我々と何ら変わらない「人間」なのだろう。人間が牛を殺して皮を剥ぎ、それをバッグやら靴やらに加工するように、彼らは平気な顔で人間を殺して擬態のための宿主に使う。それは異常なのではない。根本的に違う人種である故の行動なのだ。それはちょうど、古代から戦争捕虜や異民族を物言う道具として扱う風潮があったことと似ている。文化の違い、特に遅れた人間を、対等な人間とはどうしても思えないものなのだろう。しかし巳嶋は違った。私は彼の心の内を読めるわけではないので、全て憶測で語らせてもらうが、彼は多分、人を見下すことも敬愛の念を抱くこともなく、ただ真っ直ぐに対等なものとして見つめている。全人類は彼の前では平等であり、また無防備だ。全ての武装や装飾、その人を形取るもの全て引き剥がし、自分も同じように無防備になって中身を曝け出している。だが、私含め多くの人は、自分の全てを見透かされる恐怖で相手を同じように見つめることができない。その間に巳嶋は唯独り、相手の全てを見ている。勝手に分かり合えた気持ちになりながら。今の私に思い出されるものがもう一つだけあった。私が姉への愛故に、人を殺し自分の命をも投げ打つ覚悟を決めていたと知った時、彼は「すごい」と言った。「真似できない」と。彼は孤独な人だ。全てを平等に見るために、誰一人として『特別』を作れない。全ての人に興味を持つということは、同時にどの個人にも興味がないということだった。今はそれをやっと理解した、担当6年目の春である。

終

文芸部

天辺

結成14年目、冬。スタジオの電飾がいつまでもチカチカと目を焼いている。

沸き立つ歓声、宙を舞う金テープ。20××年、M-1グランプリ決勝。俺たちは、負けた。

「来年、だな。」

大人数が雑に詰め込まれた楽屋は人数の割に静かだった。瞼の裏から消えない丸いスタジオ照明の残像を逃がすものかと睨みつけて、喋ろうともしない。衣摺れの音だけが響く楽屋で、右側から聞こえる相方、加治の低い声はよく耳に馴染んだ。

「来年まで、だろ。」

M-1グランプリ。全ての漫才師が求めるその栄光にありつくための切符は誰しもが持っているわけではない。出場資格、結成15年以内。たった15回のチャンス。たこ氷というコンビを組んでから早14年。20代から挑戦し続けて、もう30代も後半に突入しようとしている。「もうたこ氷は売れてるやろ」と何度も言われた。いくら単独ライブツアーを成功させても、レギュラー番組を掴み取っても、「お笑い」に取り憑かれた自分がまだ止まってはいけないと囁いてくるのだ。

来年まで。14回目の敗北の後には、勝利しか許されていない。

＊

「……やめてえな。」

カメラもついてこない帰り道、思わず本音が溢れる。

「なにを？」

「M-1。」

冷気が鼻に刺さって痛い。先程まで汗まみれになって舞台に立っていた体が寒さに侵食されていく。冷えて澄んだ空気は小さな声すらも丁寧に拾い上げた。

帰ってこない返事をうかがうように右側を向くと、加治は少し後ろで立ち止まって空を見上げていた。

「俺ら、なんでM-1出てるんだろうな。」

「まあまあ売れたしな。全国ツアーも満員御礼！出る意味、無いけど。」

「狂ってるよ。」

「はは、まったくだな。」

乾燥した喉に笑いが張り付いて上手く笑えない。5000組近いエントリーの中でトップファイブ。よくやった方だと思う。だが、負けた瞬間の絶望は何度経験しても慣れないもので、「世界で一番つまらない」と烙印をおされてしまったかのような気分

報

る。師匠の酷評が向こう一年、いやもっと先まで心臓を炙り続ける。それでも「漫才の頂点」に拘り続けるのはなぜなのか。それはきっと、俺たちが「狂った漫才バカ」だからだ。

「やめてもいいよ、俺はね。」

ネタ作ってるのお前だし。と付け足して手持ち無沙汰にカイロを揉む相方の視線が突き刺さる。そろそろ相方のアパートに着くころだ。何度引っ越せといても頑なに譲らないボロアパートに相方が住み始めてからそろそろ16年が経つ。コンビを結成してから14年間、ネタ合わせをするために何度も迎えに来た家。深夜に二人だけで馬鹿騒ぎして隣のオオタさんに怒鳴られた家。

どうやら知らない間にポストが新しくなったようで、薄暗い幽霊屋敷のようなアパートにポストだけがコントラストを作っている。加治と書かれたネームプレートの隣は空白になっていた。

「じゃ、俺はここで。」

「おう。」

ワイヤレスイヤホンを取り出して、片手間に手を振る。

「おい。」

夜の静寂に似合わない大声で呼び止められて反射的に振り返る。

「……来年、出るよな。」

スマホをポケットにしまって相方の顔を見る。コンビを組んだ頃より目尻のシワが増えた。コントネタで学ランを着ることが厳しくなってきた。同期は疎か、後輩の結婚式に呼ばれることが多くなった。14年。たこ氷としてコンビで築いてきた年月を思い返す。苦しかった。殊にM-1においては特に苦しめられた。何度も辞めたいと思ったし、さっきの言葉も嘘ではない。だが、出るしかない。漫才の頂点を目指すことを諦められない。

「……来年、優勝したら引っ越せよ。」

俺の言葉を聞いた加治は少し目を見開いて、それから笑った。

「それは困るな！」

「……じゃ、また明日。」

「頑張ろうな。」

「言われなくても。」

結成14年目の冬の終わりが近付く匂いがした。

＊

煙草の小さな火すら大きな火事の原因になりうる。

「ごめん。」

文芸部

いくらか痩せこけた相方の顔が痛々しい。青黒く黒ずんだ隈が睡眠時間の少なさを雄弁に物語っている。

今をときめくお笑いコンビ、たこ氷のツッコミ加治の炎上。世間が見逃すはずがなかった。

きっかけは笑ってしまうほど些細なもので、ニュース番組での小さな小さな失言だった。そのトークは劇場でのテッパンネタで、他の芸人も使うようなちょっとした不謹慎な発言。いつもなら周りの芸人、もしくは俺がそれをボケとして丁寧に拾い上げ笑いに昇華しておしまいだった。

だが今回は言う場所が圧倒的に間違っていた。本来なら芸人の出る幕ではないニュース番組ではボケてもボケと取られずに白けることも珍しくない。しかも今回の加治のような場所を選ぶ発言をしたとなればその場の空気は一瞬にして凍りつく。

案の定次の日のネットニュースは加治の話題で持ちきりだった。「たこ氷加治、ニュース番組で失言。」「他の番組でも失言を繰り返していた。」事実を悪い意味で誇張して声高らかに伝えるその見出しは煙草の火を大きな火事にするには十分すぎるものだった。

「謝らなくていいよ。まあ、反省はして欲しいけど。」

「……うん。」

「CM、全てバラシです。番組もいくつか。」

売れ始めた時期からお世話になっているマネージャーも心なしか顔が青ざめている。事務所から電話がかかってきたようで、申し訳なさそうに、逃げるように席を外した。

「どうしようか、これから。」

「……ごめん。」

「謝罪はもう十分。どうするか考えよう。」

「……M-1、出られないよな。」

「……。」

エントリーの締め切りは来週まで迫っている。大きな炎上をした後は落ち着くまでじっとしていた方が良くと言うのが一般論で、お世話になっている先輩にもそう言われた。

「もう少し、悩ませて。」

その日はそれだけで帰ることにした。明日は俺だけのラジオ撮影。二人の番組だがしばらくは俺とゲストだけで進めていくらしい。

二人のタクシー車内。なんとなく左に座った相方がむず痒かった。

「M-1出るん？」

ラジオ収録。目の前に座った先輩の視線がまっすぐに突き刺さる。

「それラジオで聞くのズルくないですか！」
はは、と笑って誤魔化そうとするが長い付き合いの先輩にそんな小手先は通じない。

「……迷ってます。」

「そっか。」

そこからはいつもと何も変わらないラジオ進行。もたつく時間は何度かあったが先輩のさりげないフォローでなんとか持ち直すことができた。

「たこ氷はさ、おもろいんやから。舞台には戻り。」

「……はい。」

マイク越しにニカッと笑った先輩の表情が頼もしくて、暖かかった。収録終わり、なんとなく缶コーヒーを啜る俺を横目にスタッフが忙しなく歩き回っている。次の番組は数年後輩の冠番組。いつの間にか俺たちよりも世間の人気を勝ち取ってしまっていた。きっと、俺たち二人がいなくてもこの芸能界は何事もなかったかのように回っていく。大勢のガヤのたった2席のために何もかもを犠牲にする芸人は五万という。

たかがお笑い、されど漫才。だがそこに一生を賭ける価値がある。

「お疲れ様。」

今帰るところだったらしい先輩が缶コーヒーを片手に立っていた。口元にはニカリとした見慣れた笑顔。朗らかな先輩の表情はいくらか心を軽くした。

「俺ら、このまま消えちゃうんすかね。」

小さな声の愚痴。今後の不安を全て凝縮した言葉を聞いた先輩はピクリと眉を動かした。

「それをどうにかするのが相方の仕事やろ。」

顔をあげるとそこには笑顔は浮かんでいなかった。

「お前が加治にできることはなんや、たこ氷のためにできることはなんや。よう考えろ。」

相方のために、コンビのためにできること。一番、俺たちがやりたいこと。

「俺は、俺たちは、たこ氷の漫才おもろいと思ってるからな。」

「……あざっす。」

もう一度顔をあげるとその顔にはいつもテレビで見ると変わらない笑顔があった。

「先輩、今度飲み行きましょう、俺が奢るんで。」

「生意気な後輩やな〜！」

笑いながら手を振って未開封の缶コーヒーを手に先輩は帰っていく。持っていた開封済みのコーヒーを置いて代わりに手にしたのはスマートフォン。冬場の鞆に入れたままだったスマートフォンは痛いくらいに冷たい温度を保っている。

〈ラジオ、聞いてた？〉

文芸部

唐突に送ったメッセージにはすぐ既読の2文字がついて、今まで既読遅かったくせになと思わず笑みが溢れた。

〈聞いてた。お疲れ。〉

その返事には返さず、突然電話をかけてみると数コール聞こえた後にぶつりと電話をとる音がした。

「もしもし？」

「……もしもし。ラジオお疲れ。」

「加治。」

「何？」

いつもよりいくらか暗いトーンの声をかき消すように大きな声で、ゆっくりと告げる。相方のために、たこ氷のために俺ができること。

「M-1、出るぞ。」

「……え？」

電話口から聞こえる動揺したような声を無視するように電話をぶつりと切って、ポケットにねじ込む。ポケットが熱い。短時間の電話で熱くなるほど古くなっているのだろうか。だが、きっとそれも悪くない。

全ての予選、準決勝、決勝、全て違うネタを出そう。中学時代に書き溜めていた古いネタ帳を実家から送ってもらうのもいいかもしれない。

俺たちにニュースなんて似合わない。お笑いだけが、漫才だけが俺たちの生きていく道なのだから。

「とりあえず予選用のネタ、6本書いてきた。」

「これ、全部新ネタ？」

「そう。この中から2本選んでくれ、面白くなかったらまた書いてくる。」

「だから、俺出ないって……。」

事務所の一室。目深に被った帽子の下から覗く視線は机の上のコピー冊子には注がれない。

「お前は面白いからさ、ピンとか他の芸人と組むとか……あるだろ。」

加治が完全に下を向くと視線はとうとう完全に見えなくなってしまった。

「ねえよそんなの。……お前が本当に芸人辞めるなら俺も芸人やめる。」

「そんな——」

「コンビだろ、俺ら。」

「……っ。」

「芸人始めた時からたこ氷なんだから今更この屋号外す気はない。」

「でも……。」

「M-1出てからでも遅くないだろ。M-1は「その日一番面白い奴ら」が勝つ。炎上も何も関係ない。」
加治の表情はまだどこか晴れない。机に置かれたままの拳が行き場を無くした感情をぶつけるように

握り込まれる。

「……どうせ辞めるならさ。15年間の漫才師人生だ、漫才で締めようぜ。」

M-1は去年準決勝まで残った芸人はシード権が与えられ、2回戦からの参加となる。2回戦、3回戦と進み、準決勝で勝利したら晴れて決勝進出。

長かった梅雨が終わって夏が来る。5000組近い芸人の頂点を目指す戦いが始まろうとしている。

汗と湿気でじっとりと重くなったTシャツが背中に張り付くと同時に、一匹だけ早まった蟬がうるさいほどの鳴き声をあげていた。

あっという間に月日はたち、とうとう準決勝の日を迎えた。

今までの予選では予想通り、お客さんの反応も上々で順当に準決勝まで駒を進めた。

だが、相方はまだ笑っていない。

いつもならもっと楽しそうに漫才をする相方がどこか苦しそうに漫才をしている様子もお客さんには伝わっていたようで、何度か間が合わずにややスベリしてしまったこともある。それでもなんとか持ち直してここまでたどり着いた。準決勝の楽屋には顔見知りの芸人が何人もいて、全員が真剣な表情をしていた。痛いほどの緊張感がびりびりと肌を焼く。隣の相方も心なしか青い顔をしていて何度も水を口に含んでいた。皆真剣。数日前、テレビ局で先輩に会った時のことをぼんやりと思い出す。

「出ることにしたんやな。M-1。」

テレビ局でたまたま出会った先輩の楽屋で、そう話を振られた。

「はい。……先輩のおかげです。」

「そんな大したことしてへんよ。持ち上げすぎやって。」

奥では先輩の相方が手持ち無沙汰にスマホをいじっていた。今年からM-1の審査員に加わるらしく、俺たちのM-1出場の話なんてなかったかのように世間の関心はそちらに移っている。

「ネタ、全部新ネタで行こうと思って。」

「それは……ずいぶん大胆やな。」

先輩は何が面白いのか声を上げて笑って、それから独り言のように口を開いた。

「お前らはほんまにおもしろいやからさ。頑張れ。」

「……あざっす。」

じゃあ、と楽屋を後にするときにずっと口を閉ざしていた奥から声がかかった。

「審査員も真剣やから。おもしろいやつを評価するで。」

「……よろしくお願いします！」

文芸部

勢いよく頭を下げると手前にいた先輩が「あいつな、初めての審査員やから調子のっとなねん」と茶化すと声を荒げて「うるさいなあ！エールや！俺なりの！」と怒号が飛んでくる。いつもと変わらないやり取りに思わず苦笑して楽屋を後にした。

先輩も後輩も同期もいつもと変わらずに接してくれる暖かさが心地いい。事務所も歴も関係なく一緒に面白いものを作り上げていく芸人の世界が好きだ。楽屋にまで笑い声が響いてくる。確か今は結成2年目の若手の手番だったはずだ。劇場で受ける笑い声にいくら慣れてもM-1の空気感は全く違う。漫才一本で客を笑わせ、評価させなければならない。何度水を飲んでも口が乾く。体の奥底から溶岩のようなものが込み上げてきて今にも吐いてしまいそうだった。

「次3890番たこ氷さん準備お願いしまあす！！」
バチン！乾いた音が右から聞こえてきた。両頬を少し赤く染めた相方が「行こう。」と呟いた。

「顔怖いぞ。加治。」

「嘘。」

「本当。マジで顔怖いぞ、指名手配犯と見間違えそうだった。」

「嘘お……………」

「本当だって。」

未だに炎上前のようなテンポ感が戻らない。原因はきっと加治の緊張だった。茶化すようなボケでも真に受けて何度も繰り返し水を口にふくんでいた。

「お客さん笑かすのに芸人が笑わないでどうするんだよ。」

出囃子が鳴る。

「俺たちが一番面白い。自信持っていけ。」

舞台袖から一步出ると今までの予選や劇場とはまるで違う熱気が体を包んだ。

「どうも～！」

口が一瞬にして乾く。汗が滝のように出てくる。準決勝のために温存していた自信のあるネタ。何度もブラッシュアップしてたこ氷の良さをふんだんに盛り込んだ自信作だ。

ツカミには炎上の自虐ネタ。加治には何も伝えていなかったの横を見ると少し驚いていて、悔しいけど面白くて笑ってしまった。ツッコミで2倍にも3倍にも膨れ上がった笑いが体を震わせる。

楽しい、楽しい。お客さんの笑い声で、相方のツッコミで、生きているという感覚を嫌でも実感させられる。スーツの汗がピツタリと背中に張り付いて、それすらも笑ってしまうほどに面白い。自分のボケで相方が笑う。それに触発されるように会場が爆発

するように笑う。畳みかけるようなボケがウケるたびに前のような感覚に段々と戻っていく。俺がボケて、相方がツッコんで。笑いに窒息しそうだった。ネタなのかただのべしゃりなのかすらも分からなくなったころ、時間切れを告げるブザーが鳴った。最後の大ボケ、そしていつも通りの加治の言葉で漫才は締めくくられる。

「もういいよ」

「どうも、ありがとうございました！」

割れんばかりの拍手。奥にはよく見知った、長い付き合いのファンもいた。そのことに今初めて気づいたくらいに夢中で漫才をしていたのだということに気付いて、なんだか少し恥ずかしい。

楽屋は舞台上よりずっと冷えていて、それと対照的に体の中だけが燃えるように熱かった。

準決勝の結果発表は当日に行われる。何度も立った結果発表の場所。加治がポツリと呟いた。

「楽しいな。漫才。」

「……芸歴15年目のくせに今更だろ。」

「それはそうだけど。……改めて、さ。」

「……まあ、わかるかな。」

苦楽を共にした同期が呼ばれる。

巷を賑わせている若手が呼ばれる。

面白いのにずっと燻っていた地下芸人の後輩が呼ばれる。

「最後の一組です。」

15年間。長かった。出会った頃は高校生だったファンに子供ができた。独身のオッサン二人、ずっと漫才だけに捧げてきた。もう今更後悔なんてない。

ただ、漫才の頂点に立ってみたいかった。

自然と両腕に力が入る。どうか、どうか。

まだM-1という祭りの中で二人で漫才がしたい。

まだ、終わってほしくない。

「3890番、たこ氷！」

息が止まった。まだできる。あの舞台に立てる。

M-1という舞台にまだしがみついている。

ふと、名前を呼ばれた。

「——ありがとう。」

子供のように嗚咽を漏らす相方の背中をたたく。

「まだ始まってもねえよ。」

俺の右側で、相方が笑う。

腐っても漫才師。たかが漫才、されど漫才。

センターマイク一本で目の前のお客さんを、テレビの前の人たちを。

「俺たちが一番、面白い！」

俺の右側で、相方が笑う。

漫才師。それはセンターマイク一本で、

——相方を、笑わせる仕事。

終

文芸部

愛で殺される

降りそうなまま執拗に曇った空がうっとうしい十一月のある日曜日の朝、東京都私立城東高校一年 黒木 椎が遺体で発見された。

その遺体は溺死と判断され、そう報道されたが、背中に何故か鮮血に滲む隙もないほど深い傷を負っていた。

平井のどか

恋愛感情の縛れは殺人の動機になりやすい。

一年前か二年前か、いつだったかは曖昧だけれどテレビでニュースキャスターさんがそんなことを言っていたのを覚えている。

中学の頃から好きだった君が同じ高校だと知って喜んだ中学校の卒業式。同じクラスだと知り大はしゃぎした高校入学式。勇気をだしてクラスラインから追加した君のライン。ラインミュージックに設定していたから会話のきっかけになるかとも思い聴いたきのこ帝国のクロノスタシスにも、それを君に伝えたら教えてくれて聴き始めたマイヘアの歌、クリープハイプの雰囲気にもすっかり嵌ってしまったし、君からおすすめしてもらった録黄色社会のインスタもフォローしたしTwitterでミスグリやRADの通知も取り始めた。

七月君は他校の女の子と付き合いはじめたね。一度だけ見かけた君の隣に立っていたその子はゆるくウェーブのかかった少し色素薄めの長い髪を、うなじの上で巻き上げて留めていた。透き通るような肌に大きな瞳の黒さが目立つ。まっすぐ伸びた鼻筋の下に薄く形のいい唇があった。

正直私が一番彼と仲がいいと思っていたから彼女が出来たなんて信じられなかったし、何かタチの悪い冗談だと思った。でも実際君が彼女と並んで歩いているのを見て、「きらら」といつもとは違う大切な人の名前を呼ぶ一段と優しい声色を聞いて、暗い淵に引きずり込まれたような虚脱感を感じた。私は歌を聞く度、通知が来る度に君のことを思い出してしまうのに。最近の言葉で言うならBSS(ぼくが先に好きだったのに)とでもいうのだろうか、敗北感のような喪失感のようなもの、それから期待していた自分、お門違いかもしれないけれど期待させた君にまで怒りを抱いてしまった。でも私は何よりも誰よりもやっぱり私より後に知り合ったはずなのに彼の、黒木くんの横を並んで、あんなに大切にされている「きらら」さんへ憎悪と羨望と嫉妬に満ちた感情に駆られるまでそう時間はかからなかった。当たり前だと思う。まあそんな感情を抱いたところで実行に

ぽめらにあん

移せるほどの行動力を持ち合わせていたのなら、とっくに告白していただろう。結局私はこの気持ちを飲み込むしか無かった。私の恋心はきっとこのまま段々と、ときの流れと共に消えて行く。

黒木凜

「黒木椎くん、凜くん、二人とも男の子にしては珍しい可愛らしい名前ね」と小学一年生の時担任だった若菜先生に言われた。

保育園に通っていた時から女の子みたいな名前だね、と言われることが多くて男の子っぽい、ということに憧れを抱いていた当時の僕はいつもは可愛い名前と言われたら怒っていたし名前に若干のコンプレックスを抱いていた。けれど大好きなお兄ちゃんの椎とまとめて言われた「可愛い」は嬉しくてにこにこしていたら椎にも「りん、楽しそうだね」と笑われてしまった。僕と椎は双子で僕はずっと椎のことが何より誰より大好きだった。お母さんには今もまだ隠したままの点数の悪かった算数のテスト、初めてできた好きな人、校長先生が実はカツラだったとかどうでもいいことまで僕は何でも椎に話していたし、椎も僕にはなんでも話してくれているのだと思っていた。椎は僕にとって所謂依存先のようなものだったのだろう。

だから、椎に彼女ができたと聞いた時の動揺はもう言い表しようもないし言ったところで到底想像してもらうことも出来ないと思う。妬けるなあ、なんて生半可なものではない。いつからとかなんでその子とかでは無くて椎が誰かと付き合っている、ということに耐えられなかった。「きらら」がいなければ椎を取り戻せると思った。切羽詰まった絶望感と怒りが爆発的な殺意に変わるのなんて本当に一瞬だった。しかし、もし「きらら」を失ってもまた椎に大切な人ができるのなら、また同じ苦しみを感じないといけないのかと思った。恋に盲目になっていく兄の、椎の姿なんて見たくなかった。

椎の聞くもの全てを、奪いたい。

椎の視界を、奪いたい。

椎の声を、奪いたい。

椎の幸せを、奪いたい。

椎の命を、僕が終わらせたい。

椎の生涯が欲しい。

椎の全部全部が欲しい。

僕なしでも生きていける椎なんていない。

文芸部

僕達は兄弟だし誓って恋ではない。
ホームセンターで買った見るからに切れが良さそうなナイフを片手に駅に向かった。

齋藤きらら
私の存在が君の邪魔になっているのは明らかだった。君は色んな人に愛されている。
私のことは少し……いやかなり嫌っている椎くんの弟の凜くんも、1度だけ見かけた椎くんの同級生の女の子も椎くんのことが大好きなのが伝わってきた。
椎くんから離れないといつか誰かに殺されるんじゃないかを感じるようになった。
それでも君をとられたくないと思ってしまい、君と離れたくはない。
稀に小説や漫画で殺したくなるくらいに好き、愛しているから殺したい。という表現が使われているのが、椎くんにはそう思わせる才能のようなものがあるのかもしれない。

ゴーゴーと雨が降っている。椎くんの最寄り駅の時計台の下で私たちは待ち合わせをしていた。ベンチに腰をおろしている椎くんの姿を見つけ驚かせよう！と思い後ろから回りこんだ。「わっ！」と声をかけようとした時、椎くんの着ている黒い服に黒い濃い臙脂色の跡が広がっているのに気が付いた。瞬間、血の気が引いた。幸いと言っていいのか、椎くんはまだ息をしている。
椎くんは私の存在に気付き「ごめん」絞り出すような声で告げ私に身を委ねた。首元で椎くんが深い吸息と速い呼息を繰り返しているのを感じる。
今までの人生でこんなにも人の死を身近に感じたことがあったらどうか、記憶を巡らせてみるが思い当たらない。
救急車を呼べば助かるのだろうか。誰か助けてください！今ここでそう叫べば助かるのだろうか。本当に気持ちが悪い自覚はあるし、きっと理解してもらうことはできないと思うけれど、椎くんが誰かに刺されたせいで死んでしまうくらいなら私が椎くんを殺そうと思った。殺そう、というか一緒に死のうと思った。

兎に角このままじゃいけないと椎くんの腕を自分の肩に回し、からだを支え、急いで駅のタクシー乗り場からタクシーに乗った。
目的地は、と聞かれ何も考えていなかったがとりあえず「一番近くの川まで」と頼んだ。
五分くらい走ったところで多摩川の河川敷に着いた。
「雨が強いから足下に気をつけてください」という運転手さんの言葉に背を向けながら川の方に歩いて行く。
あと一步踏み出したらこのまま一緒に川に流されていくだろう。後悔も躊躇う気もない。自己満足の自己犠牲かもしれないがそれでよかった。そっと一步踏み出し水の流れに身を委ねた。ふと身体が楽になった。視界も、周囲の音も、雨に打たれている感覚も、意識も、全てが遠のいていく。遠のいていく意識の中君のことだけを考えていた。

君の耳が聞こえないのなら、私の耳をあげる。
君の目が見えないのなら、私の目をあげる。
君の声が失われたのなら、私の声をあげる。
君が幸せでないのなら、私の幸せをあげる。
君の命が終わってしまうのなら、私の命をあげる。
私の生涯は君に捧ぐためにあるから。
全部全部君にあげる。

どれくらい流されたのかは分からない。目が覚めた、周囲の声や物音、手足に走る激痛全ての感覚が戻ってきた。私は何故か見慣れない病院のベッドの上にいた。
病室のテレビが黒木椎の溺死を告げている。
失敗したのだ、理解した。
心中に失敗したと理解した時、一緒に死のうとしていたひとだけ死んでしまったと知った時あの太宰治もこんな感情を抱いたのだろうか。
今頬を伝っているものは涙なのか、さっきまであびていた雨なのかも分からない。

ごめん。ごめん。ごめん。

終

文芸部

アンデルセンの見た夢

あぶくが口から溢れていく。耳がどっぷりと海水を飲み込んで、小さな心臓の音と小さな泡がごぼごぼと消えるだけの体内を満たしていった。

空気を逃すためのあぶくは次第に私の体を分解するためにと目的を変える。貴方に触れた指先が、貴方と言葉を交わしたくて交わせなかった唇が、初めて大地を踏み締めた両足が、美しい歌を歌った喉があぶくになってどこまでも青く澄んでいる海に溶けていく。

最期に目にうつすのは貴方がいい。きっと素敵ははずだ。そう願って目を閉じる。貴方の顔も、声も、思い出せやしなかった。

天真爛漫で純粹無垢だった私は、貴方に恋した私は、貴方の愛を望んだ私は。もう溶けて消えていったけど。いつまでも貴方の記憶に在りたい。今はただ、そう思えた。

「はい、お終い。これにて、彼女はあぶくとなり、海にとけて天にのぼりました。」
さっきまで、読んでいた本を投げ出す。

「お姉よ、せっかく、好きになった人がいてその人に近づけるように頑張ったのに最期には海に沈んで結末はあぶくだよ。非恋だね、素晴らしいや。現実ではキラキラな御伽噺とは違って、救いなんて存在しないということを伝えるためにかいたのかな、この話を書いた人はセンスがあるね。」

私が投げ出した本を拾いながら道徳心の欠片もないことを言い放つ弟。

弟よ、恐らく作者はそんなことを伝える為に書いたのではないと思うぞ。

でも、もし自分が彼女を救うとしたらどうするかい。

「お姉よ、そんなの僕が彼女の惚れ込んだ男に会わせなければいい。それか、僕が彼女と愛を誓ってしまえばいいだろう。」

なんて、自信満々なんだ。傲慢すぎやしないだろうか。

「では、貴方は彼女を、あぶくとなって生涯を閉じた彼女を救って下さいますか。」

部員全員

本から、訛りの強い声が聞こえる。本を開けると魚が飛び跳ねている。

「わお、魚がぐるぐると渦巻き状に泳いでいるよ。まるでトリックアートだ。なんだか、頭がクラクラしてくるね。」

確かに。

ぐるぐるぐるぐる暗転。

体の下に、優しい温度の何かが広がっている。繰り返す波の音。数度の瞬きの後、眩しさに目が慣れてきた。

僅かに沈み込む手のひらに、体の下に広がっていたのは陽の光に当てられた砂だと分かる。足首が優しい波に絡められ、自分が海辺に倒れていたのだと理解する。

なぜこんな所に、そう思って辺りを見渡すも見覚えのある場所ではなかった。

痛む頭を使って、ぼやけた記憶をたどる。

そうだ、弟に本を読み聞かせていて、それで視界が暗転して、気がついたらここにいた。

誰か、と声を出そうとして気がつく。声が出ない。心臓が早鐘を打つ。これはまるでさっきの本に出てきた彼女、そのままじゃないか。

浅い呼吸を何度も繰り返し、とにかく自分の心を落ち着ける事だけに集中していた。

もう一度辺りを見回す。太陽の光を反射させキラキラと輝く海と背後に聳え立つ城。それはついさっきまで弟に読み聞かせていた本の挿絵にそっくりだ。出ない声に本の挿絵にそっくりな海と城。私は本の世界に入ってしまったのだろうか。

『彼女を救って下さいますか。』

此処に来る前、本からそんなことが聞こえた。海があぶくとなってしまった彼女を救うために私はこの本の世界に引き込まれたのかもしれない。

しかし、そうは言っても納得しない自分もいる。そんな非現実的な現象が起こり得るのだろうか。

文芸部

ここが現実なのかどうか判断はつかないが、今いる海辺は夢と言って片付けてしまうには海辺独特の濃い潮の香り、照りつけてくる太陽の熱、乾いているのにねっとりと足の裏にまとわりついてくるような細かく白い砂の感覚などあまりにもリアルだ。

もし引き込まれたここが白うさぎを追いかけて入ってきた不思議の国のアリスの世界だったらチェシャ猫に道を訪ねることができるかもしれないし、結局は私の夢だった。というオチだろう。ただ、もし仮にここがアリスの世界であったとて、本の世界に入ってきたというのと同じくらい非現実的な現象が起こっていることは受け入れざるを得ない。私の懸念など露知らずギラギラと照りつける陽射し、それを反射してまるで宝石のように輝いている水面をぼうっと眺めながらゆっくりと体を起こし、服と髪についてしまった砂をサッサッと手で軽く払い落とす。

人魚姫の話の通りだとするとこの後王子様の城に行って王子様に拾われるのよね。よし行ってみよう。歩いているとかなり足の裏が熱い。素足で夏のカンカン照りの中砂浜を歩いているのだから仕方ないのかもしれないが、やはり熱いので自然と駆け足のような格好になる。おとぎ話だとおしとやかに歩くところなのだろうがしょうがない。私は駆け足で城に向かう事になった。城に着くと町の人達がこちらを見た。当たり前だろう。ボロボロの服に裸足の女が歩いてきたら誰だって驚く。痛い視線をかいくぐりながら城の前に着くと丁度王子様がいた。声を掛けようとするが声が出ない。そうだった。人魚姫の話では海に住む魔女のせいで声を取られたんだった。これはかなり難問だと思ったがなんと王子様の方から声を掛けてもらえた。さすがお話の世界、現実とは違って都合が良い。

「君、服がボロボロだが大丈夫か？」

私は黙って王子様の方を見ている。

「声が出ないのか、大変だったな。私の城に来るといい。しばらく住まわせてあげよう。」

恥ずかしがり屋だとかは思わないのだろうか。まあそのおかげで城になんなく入ることができたわけだしありがたく思おう。城に入ると大勢の召使いが頭を下げてきた。見ただけでもざっと50人はいるだろ

う。迎えだけでもこれだけいるということは全員集めたら何人になるのだろう。考えるだけで恐ろしくなってくる。しばらく歩くとある部屋に着いた。

「ここが今日から君の部屋だよ。家具も自由に使ってもらっていいからね。」

私は小さく頷いた。

「じゃあ次は城の中を案内しようか。」

これにも頷く。

「この階段を降りて右へ曲がった先がダイニングルームだよ。食事をするところ。」

着いたところはかなり広い部屋で長いテーブルが1つある。「ザ・城」という感じだ。

「ダイニングルームを突っ切って左に曲がったところは中庭だよ。母上の趣味がガーデニングなんだ。」

そうなのか。かなりの種類の花があるが本当に全とお母様が育てているのだろうか。

こんな感じで城の中を案内してもらいこれからは筆談で話すということで私の部屋の前で別れた。部屋に戻って私はベッドに寝転んだ。仰向けの状態でこれからの事を考えていると1羽の鳥が窓から部屋に入ってきた。足に小さな管が付いている。その中に手紙が入っていた。その送り主はなんと弟からだった。内容は私の心配と私が人魚姫の世界に送り込まれてしまった理由だった。

お姉へ

人魚姫の世界では物語通りに進められていますか。お姉がいきなり本に吸い込まれてしまったのでしばらくは啞然としていましたが母と父が帰ってきた時に我に返り、お姉はどこかと聞かれた時に友達の家泊まっていると言っておいたのでしばらくは大丈夫だと思います。

調べてみたところお姉が人魚姫の世界に行ってしまったのは『彼女を救って下さいますか』と聞いた声の主のせいです。その声の主が僕たちの会話を聞いていて、僕が彼女を救うとしたら必ず救うと無責任に言ってしまったばかりに声の主がこの人達なら助けてくれると思って僕を人魚姫の世界に入らせようとしたところ間違ってお姉を人魚姫の世界に入れ

文芸部

てしまったみたいなのです。この鳩はこっちの世界と人魚姫の世界を行き来することができる鳩で僕が母と父に嘘をついた後どうしようかと悩んでいた時に飛んできたのです。管は元々付いていて、その中に「この鳩は現実と人魚姫の世界を行き来できる。」と書かれていたのでその鳩にこの手紙を託したというわけです。そちらの世界で具体的に何をすればいいかは海に魔女がいるのと同じように陸にも魔女がいるようなので、その人に聞いてください。弟の僕より

なるほど。私は人魚姫を助けるためにこの世界にやってきたのか。…ん？待てよ？私は今お城にいる。王子様にも会った。そして声が出ない。なぜか。
私が…人魚姫だから…。
あれ！？どういうこと？なんで私が人魚姫なの！？もしかしてこのままだと私が死んじゃうってこと！？
どうしようどうしよう。頭を落ち着かせようと深呼吸をする。私は人魚姫を助けるためにここにきたはずなのに、なんで私が人魚姫に…。いや、そんなことを考えるよりとにかく王子様に気に入られなきゃ。あと、弟にも返事を返そう。弟にどんな女子がモテるのか聞いてみようかな…

コンコン

突然ノックの音が聞こえ、私は文字通り飛び上がる。
(わえ!?)一瞬何が起こったか分からず心の中で変な声が出る。扉を開けると王子様が立っていた。
「お腹空いてるだろうと思って、夕食の時間を早めさせたんだ。ダイニングルームに行こう。」王子様はそれだけ言うと歩き始めた。私は慌てて王子様の後を追う。

長い廊下を歩いてダイニングに着くと、テーブルの上に並んだ豪華なコース料理に目を奪われた。ゆらゆらと湯気をたてる温かいスープに程よく焼き目のついた見るからに上質そうな肉。それらを見て、ごくりと生唾を飲み込む。
「君はそこの席に座ってくれ。久しぶりの客人なんだ、丁重にもてなさなくてはね。」

言われるがままに席に座る。目の前には沢山のカトラリーたち。確か外側から使うんだっけ…。昔に叩き込まれたテーブルマナーが役に立つ日が来るとは。給仕係にはワインを薦められたが流石に未成年なので断った。王子様はどうやらワインを好んでいるのかかなりのハイペースで杯を空にしていく。若干の心配をしていると急に王子様の動きが止まった。杯を持っている手は震え、今にも取り落としそう。少しアルコールで赤らんでいた顔色がみると青ざめていく。餌を求める鯉のように口を動かしたと思うと泡を吹いて椅子から崩れ落ちてしまった。

「誰か！お医者様をお呼びになって！！」
メイドがそう叫ぶ。しかし、誰がどう見ても手遅れなのは一目瞭然であった。
死んでいた。ワインに毒物が入っていたようだ。私は呆然としていた。少し間違えば私もあぁなっていた可能性は十分にあった。
何も考えられなかった。メイドが何か言っている気がしたがなにも耳に入ってこなかった。それもそうだろう。目の前で人が死んだのだから。
一つ頭を駆け巡っていたのは弟に手紙を返さなきゃという現実逃避したような考えだけだった。
ぼうっとする頭で、早足にその場を去る。女中に咎められた気がするが、働かない脳ではその言葉の意味をよく理解することができなかった。妙に確かな足取りで、自室にまで戻り、その扉を開ける。部屋の中では、弟の手紙を運んできた鳩が、何か言いたげに首を傾げてこちらを見つめていた。私は、机の引き出しにあったペンと紙とを引っ掴み、何か書こうと色々思案したが、結局何を書けばいいのか、何から書き始めればいいのかかわからず、すぐにそれらを放り出した。これからどうしよう。王子が死ねば、ハッピーエンドどころか、これから先の物語すら続かない。これで終わりじゃないのか。途方に暮れて、窓の外を見据える。

「勘の良い娘だね、嫌いじゃないよ」
ふと、凜とした気の強そうな声が響く。ギョッとして辺りを見渡すと、いつの間にやら、鳩がいなくなって、それが元いたはずの場所には一つの人影が立っていた。黒づくめのローブを身につけている。

文芸部

誰、と、声が出ないことも忘れて喉を開いた。
「私は魔女だよ。おまえも知っているだろう」
ふと、弟の手紙を思い出し、陸の？と唇だけを動かし尋ねる。すると魔女は見るからに不機嫌そうになって、私を睨んだ。

「陸の魔女ってね、それは海のやつが後から急に現れたからそう言われるようになっただけだよ。私は元からただの魔女さ。アンタの世界の汁なし坦々麺みたいなもんだよ」

ズケズケとした物言いで、そう私に凄んでくる。急に不機嫌になられたことと、よくわからない喻えをされたことで私は少し困惑したが、そのおかげである程度冷静な思考を取り戻すことができた。先程放り出した紙とペンを取って、

『すみませんでした。ところで、勘が良いってどういう意味ですか』

と書き付け、魔女に見せる。

「お前の思うことが核心をついてるってことだよ。あと私はお前の言いたいことなんてわかるからね、わざわざそんなことしないでも良いよ」

そう言われて、私はペンを側の机に置いたが、結局何のことかは解らず終いだった。

「やっぱり勘の悪い娘だね。私が言っているのはね、ハッピーエンドどころかこの物語に先は無いてことだよ」

魔女はすっぽりと頭を覆っていたフードを脱いで、私を見つめた。その銀色の美しい髪に、窓から差し込む陽光の光があたってキラキラ輝く。

「こんな急拵えで続きなんか作っても、続きどころか物語すら続かないよ。王子が致命的に馬鹿だったからここまで来たものの、そのせいで誰かに恨まれて毒殺なんかされてるし。間抜けだねえ」

『はあ……』

「そもそもこんな物語 अच्छैयाいけないのさ。救うも何も、人魚姫はとっくに海の泡。お前にどうこうできることじゃないよ」

『じゃあ、私はそもそも何でここに呼ばれたんですか』

魔女は、部屋の隅から椅子を引っ張ってくると、どかっと乱暴にそれに座る。

「お前は勘は別に良くないけど頭はいいね。『どうやって』より『どうして』が先に来るのはいいことだ。物事にはまず理由が必要だからね。お前がここに来たのは、執念と偏愛とによるものだよ」

『執念』

「そう、人魚姫を救えず狂った姉たちが、また海の魔女と取引して、今度は別世界から人魚姫の代わりを持ってこようとしちまった。まったく何が『彼女を救って』だろうね」

魔女は、この世界をぶっ壊してでもやりたいことかね、と付け足し、ため息を吐いた。

「とにかくね、別世界の人間が人魚姫の物語に関わっちゃいけない。お前はすぐに帰んな。もう既に世界が歪み始めてる。最悪、お前の世界の『人魚姫』という物語が変貌することになるよ」

『帰るって、どうやって』

「簡単だ。お前が強く願えばいい。異分子であるお前をこの世界は追い出したがってるし、元の世界でもお前を探してどうにか取り戻そうとしている者もいるしね。早く帰んな」

魔女は、急かすように言った。私は弟の顔を思い浮かべ、また魔女の方を見た。

「そうだよ、早く帰れ。お前を待っている人間がいるんだよ。お前がいなくなればこの世界の歪みは無くなるし、また同じことが起ころうとしても今度はちゃんと私が止めるからね」

『人魚姫は救えないんですか』

私がそう聞くと、魔女は目を細める。愉快そうにも、哀しそうにも見えて、私にはどういう表情なのかよく分からなかった。

「あれは元から救えない命だよ。作者がそう決めた限りはね」

『あなたは誰なんですか』

「私かい？私はただの魔女だって言ってるだろ」

魔女はそう言って、私の頬をつねる。私が顔を顰めると、大口を開けて笑った。

「さっさと帰んな、生意気なガキ。お前は帰れるんだって言ってるだろ」

私はキュッと目を瞑って、弟のことを考えた。ぐるぐるぐるぐる暗転。大きな闇の次に、光の世界にほっぽり出されて、私はいつの間にか戻っていた。

文芸部

自分の家の、自分の部屋。目の前に人魚姫の絵本を抱えて座っていた弟が、呆然として私を見つめている。

「お、お姉よ、帰ってこれたのか」

「え、ああ、うん」

声も、いつものように出すことができる。体のどこにも不具合はない。

「人魚姫は救えたのか」

弟は私に尋ねた。まだ混乱しているようで、声が震えている。

「救えなかった。救えないんだって」

私は小さな声でぽつりと言った。弟は、よくわかっていないようで、じゃあどうして帰ってこれたんだと私にまた聞いた。弟に全てを話して、理解させるには随分と時間がかかった。

終

お楽しみいただけましたでしょうか。

これが、私含め五年生が関わる最後の部誌となりました。大変な時期とはなりますが、

こうして五年間の集大成を発表できたことを

嬉しく思います。受験生の皆様、またその保護者の皆様に実際に部誌を

お手にとっていただくことができず残念に思いますが、沢山の作品の中で、

どれか一つでも心惹かれるものがあれば、製作者としてこの上ない喜びとなります。

これを機に、品川女子学院文芸部に興味を持っていただけるととても嬉しいです。

品川女子学院 文芸部一同

SJ Literature Club 2021

